江戸名所図會

四

ル 4
3605
4

門 凡 4
3605
巻 4

江戸名所圖會卷之二

天璡之部目録

東海寺
光巖寺
貴船明神社
天龍寺
海晏寺
上方海道
西光寺
長徳寺
寛永明神社
海龍寺
本光寺
常行三昧寺
品川寺
来福寺
光福寺
妙國寺
大龍寺
千躰荒神堂
納經塚
鮫洲明神社
品川驛
洲崎弁財天
磯の清水
中の橋
御殿山の桜
河原の桜
二王門
二階堂
子貫松
子貫牡丹
子洗池
八幡宮
明神森
海上人產湯井
鹿島明神

志賀文庫

昭和十九年四月五日
故三上於菟吉氏寄贈
三上庫吉

冷森八幡宮　冷石　鳥石
笠島
八景坂　俗やろん坂
磯馴松
行慶寺
蓮華寺
蘆蘭湾
戸越八幡宮
女塚
法師堂　題目堂
七面堂
法師馬回
法師茶毘所
法師焼香場
法師暁待
法師堂
鬼子母神祠
檀不
同滝ふ除て叢ぬ山ハ
惣門
坊舎
寺宮略記
子来池　日蓮上人腰掛松
梶原氏宅地
中延八幡宮
日蓮大士石像
子福寺　梶原景時墓
寺宮
長榮山京門寺
桃雲寺
長照寺
妙安寺
行方渾山忠明連宅地
大森　名産海苔　和中散産
古川薬師堂　浪速古樹
同麦藁細工
矢口村新田明神社　功徒水
長導大師像
稲木村光明寺
観音堂
同山長慧上人
敵討榎
長府碑
杉本灵泉
矢口の古事
当麻曼荼羅
法師暁待
十騎社　日本義弓祠
高畑村光明寺
蒲田梅林
蒲田八幡宮
六郷八幡宮　八幡塚
古石塔
五松
貴船明神社
圓頓寺
光明寺の池
二ノ目一

六郷渡
羽田奈良天社五
河湾　新田義貞
河湾富重宅地
堀内山王宮
河湾京桃林
厄除大師堂
六字名号碑
池上氏所蔵蜂龍盃　安中潤徒
来廣松
鹽濱
石観音堂
河湾新田明神社
成就院
河湾新田明神社
直彩尼湾厨早勝塚
同居住旧址
河霊権現社
宗生尼湾厨忠良塚
宗参寺
焼ヶ森
依ヶ木明神社
勝福寺旧址
養光寺
市場観音堂
鶴見川　鶴見橋
来吉不動堂
秋田城介義景旧館址
成願寺
白旗八幡宮
子安観音堂
松隠寺
義宮入道墓
観福寺　世ふ浦島寺
慈眼堂
浦島塚　浦島明神　浦島石像　浦島焼井　同腰掛石　金毘羅祠　砂経社　人穴
神奈川澤　同徒歩　日高焼跡　菩提樹　本覚寺
上谷川
能満院
北条上杉合戦場
河湾明神祠
能の橋　能の川

宗興寺
雲松院
折本渕島明神社 揺樹 神剛碑
本覚寺切通
版綱権現社
姥島
惟子里
左神宮
蒔田城跡
青木明神社
神明宮
金澤 同熟島 金沢貝題墓 普賢象 文殊橋
六
本牧十二天宮
惟子川
品野坂 一名権左坂
乗蓮寺
くみ妙寺 天満宮 達摩
杉田梅園
能見堂 美女石 一宝 姥石 弥陀院
観音山
小机城跡
熊野権現山 古戦場
泉谷寺
多目周防守宅地
陽光院
富士渕祠
吾妻明神社 天神の森
程ヶ谷町
古町街道
二位禅尼彩堂 熊野祠 七つ石
麻耳山 二王門
杉山神社
神戸川
界木 比義生
住吉明神社
慶雲寺
師岩熊野権現宮
西向寺
道灌山
洲乾矢戦天祠
同海渕と製る圖
擲筆松
稱名寺 達摩 金沢顕時墓 揺梅 寺宝略目 西洲橋 熊野神宮
二ノ目二

金澤文庫舊址 御所ヶ谷
薬王寺
浦の郷
野島の渡
照天松
圓通寺 御宮
能仁寺舊跡
六浦川
光傳寺
笹根権現社
烏帽子島
名産甲香
薬師堂
善態寺
洲崎
瀬戸明神社 達摩 三本松
金龍院 花石 九覧亭跡
上行寺 日蓮の上人石像
当光寺
界地藏
雀ヶ浦 一名天狗ヶ淵
裏島
兼好法師閑居舊址
天然寺
野島 土人百軒島と云
瀬戸
弱華寺
金沢系 乙鮫の浦
瀬戸橋 旅亭本屋
泥牛菴 茅師堂 蛇混枸
岩松寺
油堤
三艘浦
巾巻岩根付岩
猿島
瀬戸辨財天 福石
日蓮の上人加持水
六浦
侍従川
太寧寺 浦冠者 範頼墓
榎戸湊
裸島

萬松山東海禪寺　品川北馬場にあり花洛大德寺派の禪宗
江戸觸頭の一員にして當寺ハ輪番ゆゑに年〻八月に交代も
寛永十五年戊寅　台命を奉して澤庵和尚開創を始
所の禪園なり　塔頭十七宇
佛殿　釋尊の像を安し　額　祈禱堂　天倫筆　二重家根額
世尊寺殿　同筆　山門樓上に観音を安し　額　潮音閣　十境の一　大明院宮
公辯法親王真跡　中門　額　東海禪寺　天倫筆
鐘樓　本堂の右にあり　數夢　要津橋　南の方にあり　千歳杉　同所　橋あり
樓と号し十境の一　門へ參道の右にあり寛永の頃　大樹命せしとて今ハ其幹のみ殘れり　南の方の
十境の一　宝暦の頃暴風に吹折れ　是も　浴鳳池
方丈の庭の泉水をいう十境の一なり　寺後　釣玄室　池の北の汀にあり　大樹寛永
山下清泉流出師引之間一池於室之北面云云　二十年仲秋の頃澤庵和尚と
此所に庵法問あり　則十境の一なり　東海和尚年賦云寛永二十年癸未仲秋之夕
台駕入東海　既月於山亭台顔怡怡而出山亭猶来月明倚池上小亭亦待傍云云
奉　龍井　釣玄室の東に並ぶ寛永の頃　大樹陵茶の水に是も十境の一　萬年石　池中東の方
冷甘美なり　その水清冷
一なり　寛永二十年癸未三月十四日　大樹當寺へ台駕を枝させあり
其時遠州矣小堀政一に命せられ　所

萬年石之記　今茲寛永癸未三月十四日偶有幽

左相府見移奇形狀座於端池沼下池有島

石熟之無醒兮惟不祐險挺立皆若由醉島

翁朽乎或於苑兮李惠斯共石然彼兮防

裡之骨石遂之白之願乎之不唯突不栗

徧癡兀而合德容之趣而求奇者未知此兀而彼

貴極名酌相半時思聞焉於此江諸政一侍所臣曰非此之體如石防

極名各以所守靜篤也相君有命谷神不死曾知之在

偏得恬淡虛無之趣而有侍臣曰非此之體如石所草

得兀而合德容之趣而有侍臣曰非此之體如石所草

恬淡虛無之趣而有侍臣曰非此之體如石所草

淡虛無之趣而有侍臣曰非此之體如石所草

虛無之趣而有侍臣曰非此之體如石所草

無之趣而有侍臣曰非此之體如石所草

之趣而有侍臣曰非此之體如石所草

趣而有侍臣曰非此之體如石所草

而有侍臣曰非此之體如石所草

有侍臣曰非此之體如石所草

侍臣曰非此之體如石所草

臣曰非此之體如石所草

曰非此之體如石所草

非此之體如石所草

此之體如石所草

之體如石所草

體如石所草

如石所草

石所草

所草

草

風里幽

防栗有

彼兮島

然醉島

不由有

皆若池

立下池

乎立下

然唯突不

未曾知突

死曾知突

不知突

知突

突

兀

兀而

兀而彼

石而彼兮

如石而彼兮

石而彼兮島

之如石而彼兮島

之如石而彼兮島有

之在防栗有

至之在防栗有

可至之在防栗有

可至之在防栗有幽

懼可至之在防栗有幽

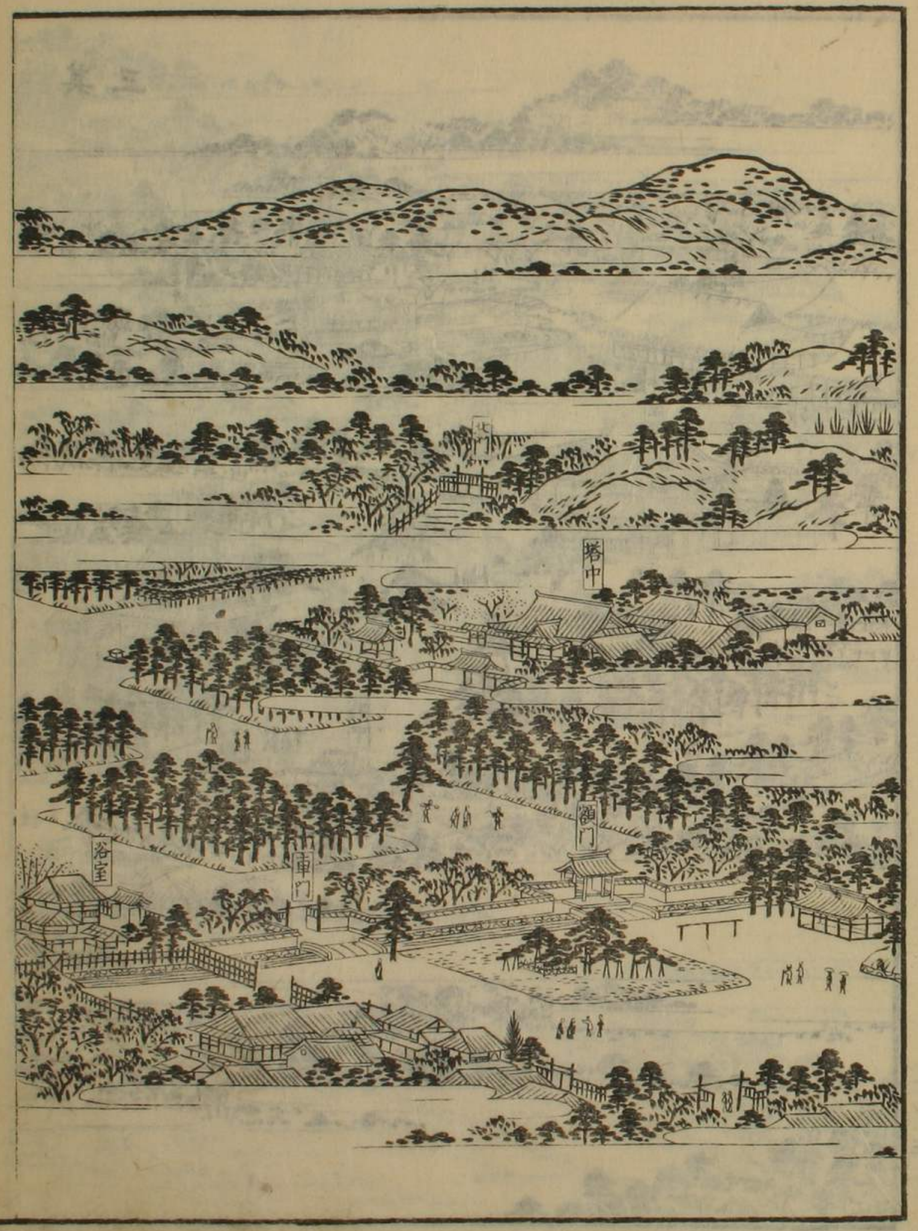
懼可至之在防栗有幽

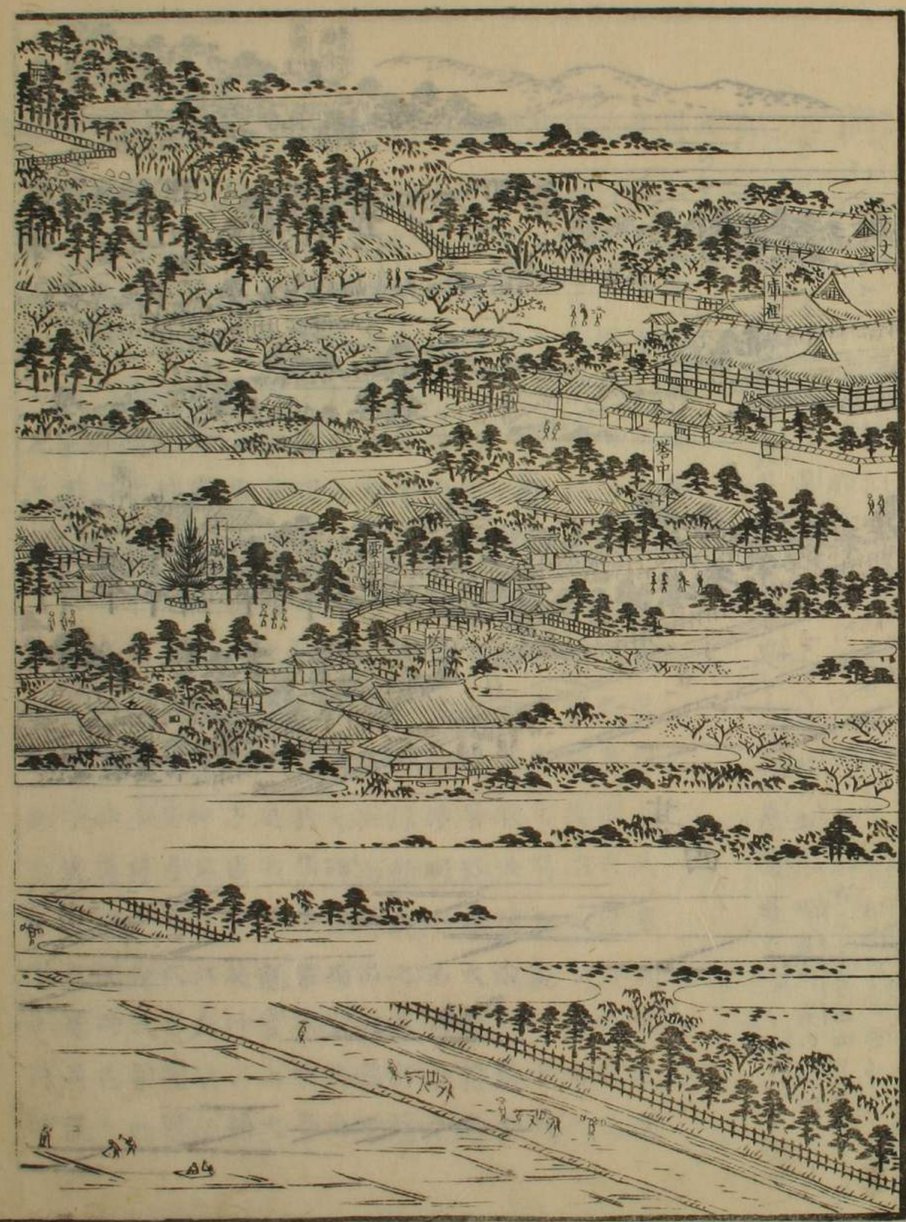
君懼可至之在防栗有幽

君懼可至之在防栗有幽

君

其二





其三
本堂
方入門
山門
白樓
鐘楼
塔中

其四

開山澤庵和尚廟

方丈の西北の隅丘の上にあり開山和尚の遺志ありて石塔を建てゝ自然の巨石を置き左右よりさゝき三四尺程つゝれ石を数十立並へたり是を羅漢石と号くまた廟地の趣ハ小堀遠州侯の指図ありと之り傍に和尚の行實を記せし石碑を建てり是を慈隠塔と号く當山十境の一なり左のごとく

銘文

序

開山澤庵和尚塔銘並序

昔者南浦明公正元間殲南遊棹入大宋國偏歴諸老時虚堂祖翁主淨慈往謁之參禪大徹終提堂之正印歸于本朝而啟迪作家爐鞴陶冶天下學者入其室者一千有餘人嗣其法者以十有五數計若興大燈國師其一人也國師入萬寒暑竪洪爐恰似精金大法幢炫無變色得證明而後閲二十之燈捐續明明不盡方今爍于朝廷山林自爾以降燈燈相傳其焔昭其化者澤庵禪師也師諱彭寘之其自謂挑晩稱東海暮翁天正初元生於但馬州出石縣平也氏少受僧業於邑之宗鏡禪寺布先西堂授法魯墳索隱於大謂曰秀喜年十有四而祝髮探嘖於先逝而去龍山寶瑞岳歸典禪寺董甫仲公居宗鏡詢之志先聞毎諱氏德禪師乃參隨至彼學改諱宗彭仲公咨叩及仲公室師方與之東行笑仲蛻而後還本寺依大江左右賦詩請益亦周旋之于山中諸老間多獲言論風旨圓鑒而國寺師穿窶而無一鉢之資只雋永于法喜禪悅而師飛錫乎泉南就文西西堂酌文字流之文西是黄龍一也汎朝下頭角而尤光文學者也臨終焉之期以所貯

勝深塵邑在寅禪峰延驩綽寺本歿于師襲彭界難命師驪亟之之
槩靖埃之雲再室視師喜有經寺也陽入實禪而寫畫有也見弗典
抱有視南門造問其爲如古二校師春室護子能平匝所鏡之就籍
炯時聲再菴大道去開見人年省眥聞師同藝殺素寫契稜機明附
覆寓色建乙仙詰霤山點風而繼衆師之邑予佛作鏡悟同辨堂師
沈南若南卯之且知祖佛味入臨陽勘酬有失者略壽授邑縱古初
痼京泡宗南拾馳其也同亡院德春辨對宗笑忱入像印南横鏡雲
有之幻不宗雲書輕師邑何于禪補而敏無云拂麾索證宗應禪英
時芳有亟羅軒謝重鰡有告本同席驚捷者何子界贊語寺答師偉
僑林時不鬱師之陽法宗遐寺年慶興而爲不突而鏡号師如一公
城菴在徐攸禪癸明語印還大秋長嘉玉先問出還涉曰執響東滴甫
州鞠泉尋之坐旦殿慶者于德八丁謨轉考起云降毫澤侍實滴公琮
薪光南復災之一下之創泉一月未云珠齋大父麾書菴巾逵公住
之匿天舊師暇新信讚建南香主師真田緇平攘宗曰賦紙綱住邑以
妙耀下觀告編南尹之一泉爲龍年跨也倡天羊洁塵祇日金邑法
勝有邑師邑大宗公于菴南古興三竈此殊下隱機面夜夜麟之陽器
寺時而視宰燈之一泉名緇鏡山十兒時請師之自易打參而陽期
守入變名相年鐘夕南曰素供南有也鏡圓領底由描其究頻春師
空泊幽利攸譜摟入于祥郊住宗五於臥鑑之不入中義鏡響菴師招
寂顯遷右於收甲師龍雲迎山禪遷鏡病國珍是佛眉師知青師

生涯爾後歸山陰之故里構一把茆於宗鏡主山之弟命身月月号受疾加寺復之入寺幕黑号河大問卓鈞然飢下扁投淵附師
子也於十不而道預一其舊輩山曰下不無　上法庵命師色寬知永淵軒明堂初
武門東一痊頌俗知黙可規固草東於日國　皇婁曰召知其還行己翁機古雲
野人海日一　予緣墨知之識木海金而師皇召聽撿二東暫翁桜同辨邑縱鏡英
氏在之也日　賻盡書也　新生落城下号情入遇東二止巳折契藝殺悟作鏡邑禪偉
安泉西世曉朝衆遺于正　筑輝成南謚也大　優暫翁係師師卿殺同辨作像印南横師
齋南北壽天奏僧誠贊係鈞之師之品天願悅　渥寓師止抵數有鑑之故
翁者岡七援莫著云詞乙命久奉日川應下師仙嚴止抵數有事內煮里
往祥唯十筆入衣痊於酉益昌　賦劍大　奏院望焉武不事內煮里構
年雲種有書木喫全其夏是辛　賀草現綸我講愈　陵憂異煮麻玉容
昇樹松三憂牌飯身上令依已鈞頌梵國旨山原高　於容玉麻麥室翁
師塔乎僧一於如於以畫師歲命致刹師　第人戊幕城色室麥栗豆給
行名其臘字本平後爲師之降賦聲使有　二論寅下外壬翁栗豆給日
實曰上五泊寺日山壽劃所使和祝師功上世辨秋徵民申同貶給日宗
求寂不十然之矣莫宗一願本歌厥住于皇微瀾師師村　貶給于鏡
銘然樹有而祖且誦同圓也寺一後持曩允翁激之於一　于日食窮而主
其曩塔九逝堂莫經年相有出首　山祖之唯起京營牛幕　窮食卿下山
塔肯蓋壓實云爲設仲相功世祈　曰若主有如師中鳴下卿主無
因參依于十云求齋冬中于制國台萬此章禪懸　時之降退無山之
循學遺全二彌謚莫示親本法基輿也松也寶師江　時地　微有之

未果今茲賚之不揣不已講習道義於乃師者莫若余也

山實撰

東曆海禪寺癸酉三年興國祥南雲

慈蔭塔下

平泉霞去曰無寂然載来然裡峻矣湧中規海室世孫汎然故

右天無塔姑横語淵一挈矩播和過子堂正

大流燈入日東現輝呈方

天無射機而才明泉相疊四其十嫡

古鏡面相生大

眼覿空諸

眞展筆頭實踐點涵之闈

道師經眞虛翁亦

師經眞虛翁亦

開山澤庵和尚影像一幅

正保二年乙酉師歲七十三畫工に命じ一圓相を作らしめ親ら一點を其中に加へ讃語を上に書して以て毒容に泥かくの如くの三軸一ハ則當寺に置一ハ則總南の南宗精舍に藏せり讃に云く

無名子告予曰邈得和尚之真展見則一圓相也山

野點一點卽書曰昔日仰嶠已燒六代圓相龍孤蒼

海重錄九菌蛙輾泥沙壁元南泉曾劃一圓相漫歸宗

坐其中麻谷作女人拜趙沙元無瑕類相如泰

重錄九菌蛙輾泥沙壁元南泉曾劃一圓相漫歸宗

家今此圓相包天地無外窮塵刹無涯無門邊世界如

麥似豆此裡衆生似粟如麻九流分列戶六藝起

修籬邑彼諍鱗鳳此火龍蛇人物是太紘俊乂亦不

些王十方薩埵列屋諸宿五百羅漢出雲覆我閒不待其主張

法身全體顯人見我廣時雖中間不後進

彌勒不慕前來釋迦阿難摧寶蓋迦葉抱袈裟宗彭

杜多却增聲價阿闍世王妄起嘆嗟不尊文殊師頻

呼衣浦童子課湯菓不窺雜聲詰急引金粟如來役

飯茶下方聲侍我屢四果聖者御我車有意氣時得

添意氣請看闇羅花斫頻以望我冥官等踊躍如

多我猶衆勢縛獄卒擒杻械捉憤鬼員鈇枷五逆衆

生抃野喜奈落罪人得時誇快然快然我這裡今日

萬般已治樂病相瘡佳納子只莫所取無好底法從莫

所捨無嫌底法若任違順境家山路猶賒噫此法檢

前絶等差赤中正者落邪佛經祖傳錄方語黙

將來空裡花乙酉閏五月七日見東海比丘其老齡七十三

正保第二前住大德

ある人この影を拜して

深度於法彩ち九ホ一天下東海を不隔九ホ

少林院
林泉
縣居大人
墓
南郭先生
墓

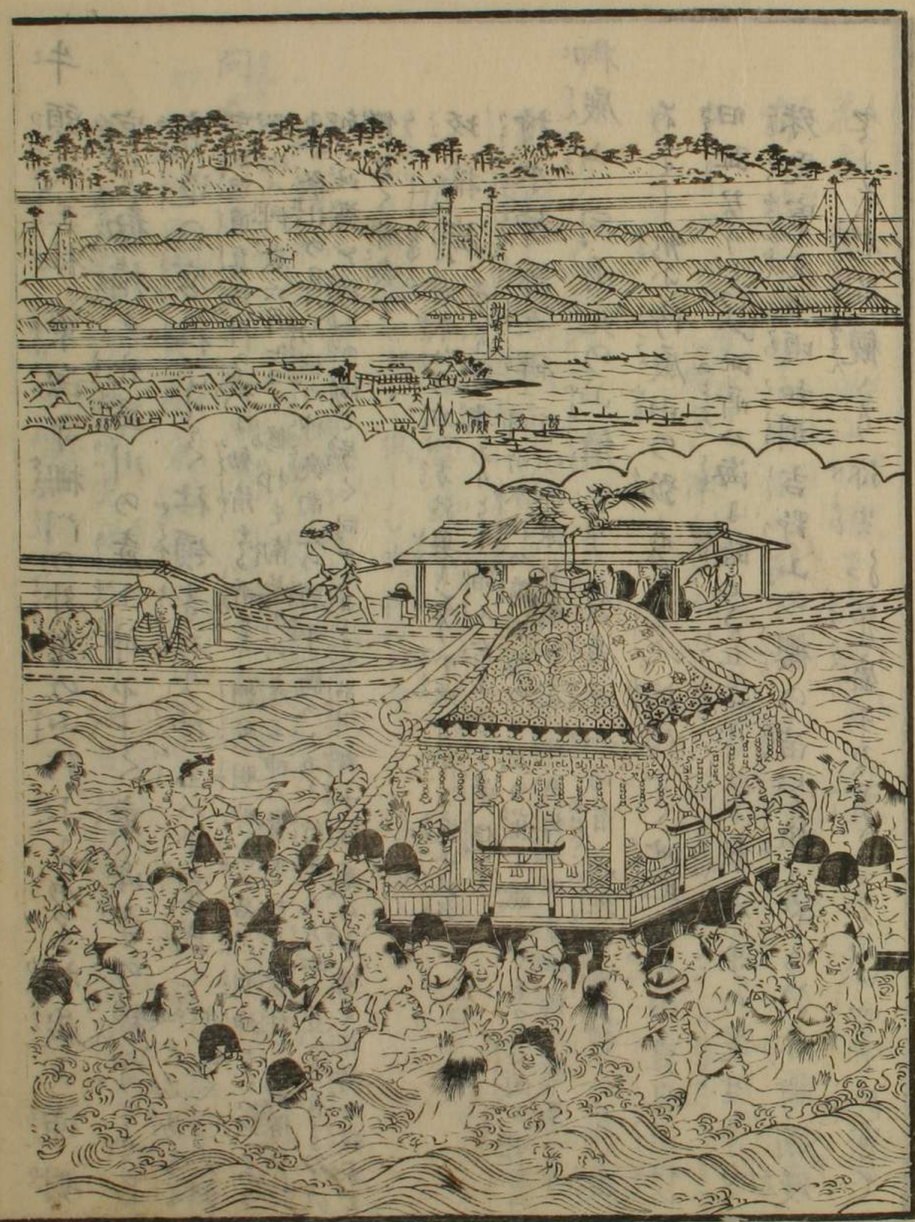
縣居大人墓　塔中少林院の後山よあり當院過去帳よ玄珠院眞淵義龍居士とあり明和六年己丑十月晦日歳七十三ゆて身まろまり形骸壹卷よ詳

南郭先生之墓　同し卵塔よあり一家の墳墓並び建り先生姓ハ服部氏諱ハ元喬字子遷俗称小右衛門南郭ハ其号なり　其先尾州津島七黨の一ゆ曾祖父某越中國高島よ徙る父の諱と元矩とゆ京師よ移る母ハ山本氏なゆて天和三年癸亥生る歳十四江戸よ来ゆて祖徠先生ゆ業を受る後三年柳澤侯よ仕へ後十八年致仕一宝暦九年己卯夏六月廿一日卒ゆ壽七十七とのみ墓碑の銘文ハこゝふ畧を其碑陰よ從四位下侍從源頼順撰臣高元碩謹書とあり

鎌倉權五郎景政靈祠　同所春雨庵の後の山よあり来由知へ此庵ハ頃の草廬春雨庵を移されし土岐家累世の祖廟ゆゆ閑山澤庵和尚寛永六年此寺ハ品川の勝區ゆゆ門前の緑水を濃淺とゆく品川乃流海口よ通を屋後青山崔嵬とゆく祇植の祠松間よ聳ゆ茂林脩竹風帆沙鳥の勝覧筆の及ふ所あゆゝ殊更方丈の林泉ゆ小堀遠州侯の差図ゆゆ庭作の規範とゆ都て滿地青松丹楓枝葉を交へ晩秋の奇觀錦繡を晒ゆゆ常に寂〻寥〻とゆく實よ禪心をもゆゆむるの一巨藍〻〻

六月六日
品川午頭
天王御輿
洗の圖

八ツ山



牛頭天王社　東海寺柵門の外左の山麓上にあり相殿に神明宮を勸請し北品川の產土神やしろ東海寺の鎮守なり

官造の宮社にして社領等あり神主は小泉氏なり　江戸名勝志に牛頭天王は永享中太田道真品川の城に勸請し祭礼は例歲六月七日に修行せり南品川の產土神は貴船なり當社とは由緒あれば祭礼の日は両社の神輿南北の驛中橋の上に行逢又左右へ立ならべ品川驛中往還の中央に旅所の假家を儲けて神輿をうつしまつる

坂稲荷　同社の右の方に興まあり小坂を作る故に此名

柳本神詠之碑　同所本社の前石階の上左の崖に臨てあり石面に明石の浦の神詠を刻月舟神祇伯卜部兼雄卿の真筆なり

御殿山　同所北の山續なり　慶長元和の間此地に省耕の御殿あるもしるし　御殿山の號あり土人相傳へて此地を太田道真居住の旧趾なりとす　此所は海に臨る丘山にして數千歩の芝生しつゝ殊更寛文の頃和州吉野山の櫻の苗を植させあり春時爛熳やしつゝ尤莊觀なり　弥生に花盛なれば雲とまがひ雪と乱れて花香は遠く浦風に吹送る　磯菜摘海人の袂を襲ふ　樽の前に醉を進むる春風は枝を鳴さず鶯の囀るも大平を奏するに似たり

寛永十七年九月十六日大樹此地に遊獵あらせられし頃御殿守澤庵和尚に和哥一首を詠ぜしめ給へる旨命せしとき

夕くれを惜しまむ木の間のゆふ嵐の音ばかりなる海の面に　澤庵

しも其日は止く空晴てうつくしかりしかば上意あり前の日雨の降うしを享保の頃檻を多く植しむ晩秋の紅葉も又一奇觀なり　仝

鑄鐘松　増上寺の鯨鐘を鑄る地なり其臨の印に植る松なり北の方畠の中に存せり

問答河岸　又御船雁木とも云へり新宿の東の海岸なり相傳へ

寛永の頃　大樹東海寺へ至らせ給ひし頃御帰時

澤庵和尚御後を見送りまつり此所迫来る　御問答あり

故に此唱あり

御殿山看花

磯の清水　御殿山の麓清水横町と云よあり往古ハ此辺まても磯辺なりしとなる此井清泉ゆゝく旱魃ゆも涸る事なし（或人云く背砂利を堀とゝ）

品川驛　江府の喉口ゆゝく東海道五十三驛の首なり日本橋より二里南北と分つ（東海寺の南より傍く貴船の社の側を流る川を堀と或人云く是則品川と称する所の水流なりと云く）

旅舍数百戸軒端を連ね常ゆ賑ハゝく往来の旅客絡繹とゝく絶せ

梅花無盡藏曰　品川　注云隔五十町有江戸城多

法華宗云云　問宗旨咎法華僧子細看來満口氷

双塔五層兼一層　蓮紅二十八差別

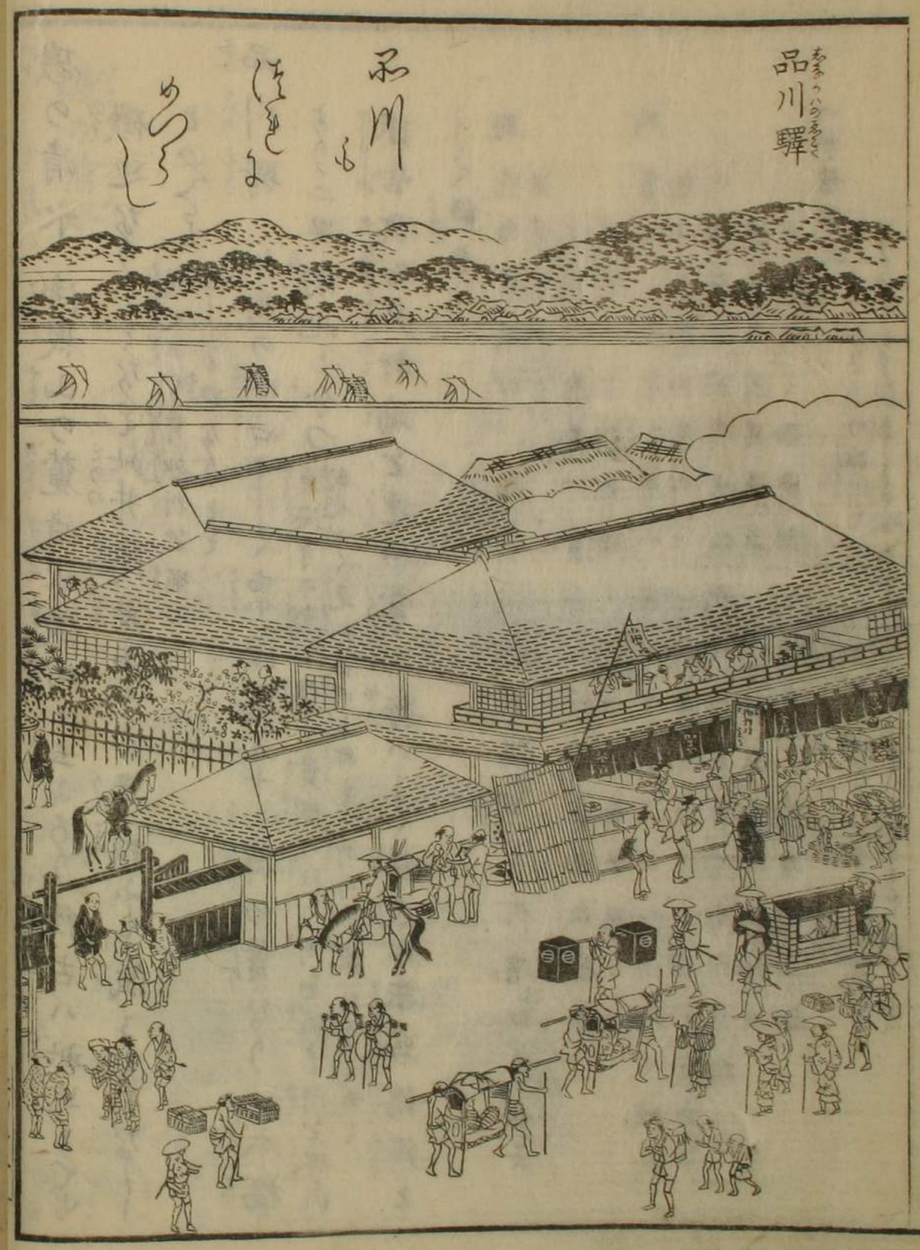
同書曰　長亨丁未小春二十又二日扣品河之岐軒

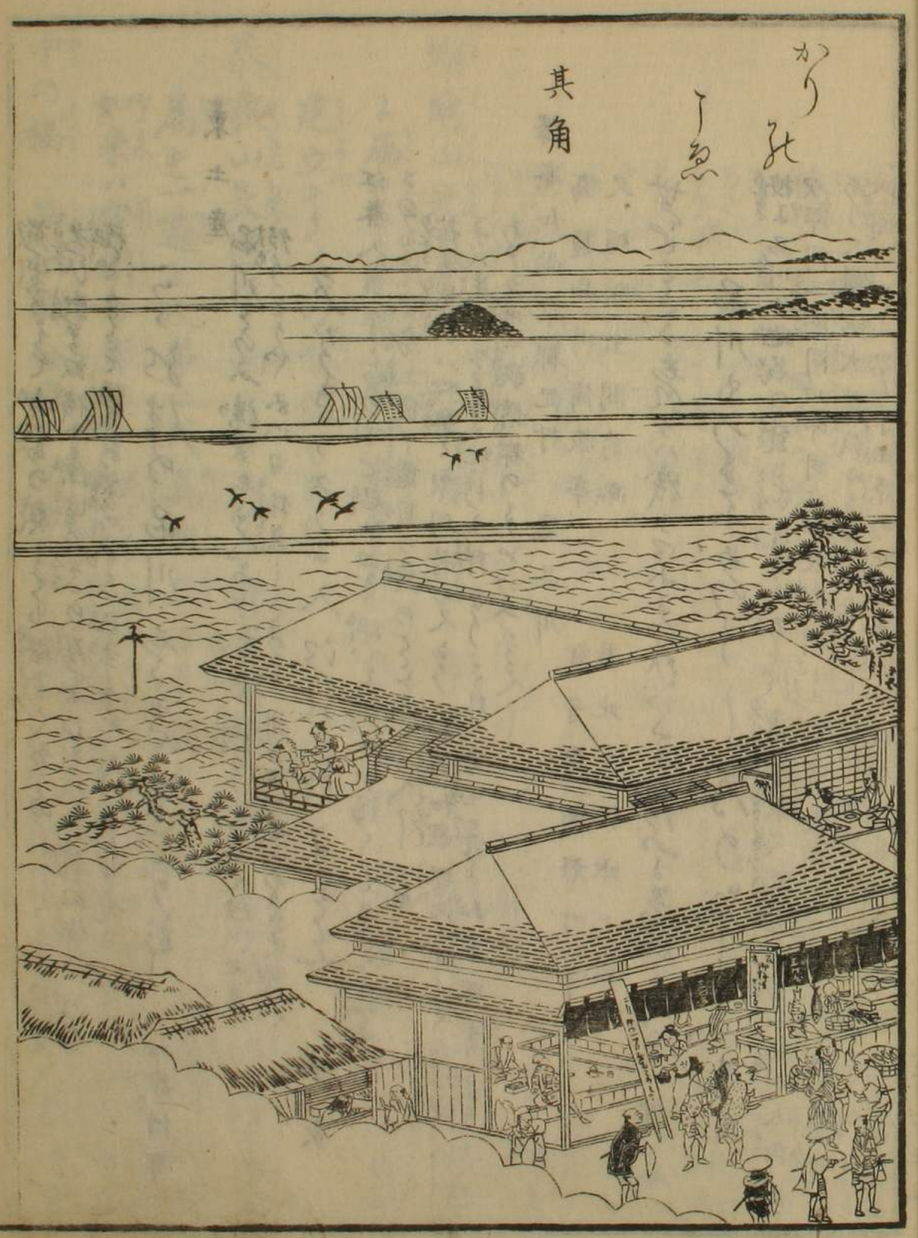
途中之濱而見六七小舟搬品河之土蓋爲塗江戸之城壁也鑿屑之餘殃及舟楫葉无情作是詩

潮氣呑濱萬頃連　殃触蚤無地不紛然

重城日ゝ勤塗壁　馬上吟看搬土船

心敬僧都記　ゝゝゝの品川とゝる津よりゝゝゝ


品川驛


其角

[illegible]

東土産

品川もとゝみ津よりもとゝく和泉堺より来りく式六七年
[illegible]ハとゝゆ五六日休息しくある夕汐よ海の辺よりきそ[illegible]

夕なきさゝみよ入江なれこのもとみ　宗長

江春入舊年とゝいふを思ひ出く汐さゝゆ安房上總下總目の前のところ[illegible]
按よ宗長ハ心敬と同時の人なり心敬曰和泉堺の人ゆゝくこゝふ来[illegible]
[illegible]ハ先よ[illegible]紀行よ洋なりされハ東土産よ和泉堺より来りくと
[illegible]ハ此心敬僧都のよをいみなる人し

澤庵和尚京都記行

過品川

橋過品川倚旅亭　智音携酒好叮嚀
又相別去問前路　吾此生涯水上萍

世をそゝる老れハ殘ゝ[illegible]ふ[illegible]ゝ　澤庵

品川もつまゝ[illegible]ゝ

其角

按よ品川の地名の發るハ近きハあ[illegible]東鑑兼久記等の書よ品川太郎同次郎同四郎同六郎太郎同小三郎實貞同右馬允同四郎太郎抔ハ[illegible]
[illegible]又鎌倉大草紙ハ品川左京亮同下総守ハの名を[illegible]何とも此国の住人なり小田原の北条家所領役帳よ荏西様ハ領とゝみ中よ品川南北とあり其頃も二つハ分まくあ[illegible]と覚えゝ南向亭云く品川四(下無)川海よ近く下流直よ海よ入のよ名つゝくと云云かく云へゝ今南北の宿の中間中の橋の下を流しく海よ入ハの河流を以是則品河なゝと又事跡合考よ往古品川高縄よりゝ東掛馬二疋並ひく通ふ[illegible]あくハ程の狹き濱路なりしと天正十八年の後台命ありて山の下より本芝のあゝり迄道中三十五丈ま切開ゝ[illegible]附ゝ云詩問集
[illegible]武藏國大崎荘往古此奈革を流ゝあゝ拾ゝ
[illegible]増補の江戸砂子ハ製ゝ革なりと[illegible]偽書考
[illegible]此訓[illegible]集ハ[illegible]由記せり[illegible]伊勢家の説を考ふ
[illegible]品草ハ歯朶草の誤なる人しと源平盛衰記よ此奈革とゝ[illegible]藍草よ
[illegible]歯朶を付[illegible]云しなる人しとゝ[illegible]たゝハ通音なり
[illegible]云しなる人しとゝ[illegible]云ゝ[illegible]優美

瑠璃山光巖寺　北馬場よあり　禪宗ゝく東海寺中清德寺
よ属せる本尊藥師如来ハ佛工春日の作なり　當寺八太田持資の
建立ゝくその影像もあり

恭敬山長德寺　四丁目よゝり時宗ゝく相州藤澤の清淨光寺ハ
属せ一遍上人弟二代真教房の草創なり　本尊阿弥陀
如来ハ定朝の作なり　當寺の創立ハ寛文四年甲辰ゝて始東海寺の
[illegible]武人云く當寺地よ[illegible]寛永十四年丁丑東海寺ハ建立の時より今の地へ移る云
中の橋　品川驛舍の中間よあり　橋南北ところ品川故よ号とも此橋下を

品川
汐干

永平三年六月
後奈良院御撰
謎合もふ
海のそら
十里ふ
きさらん
蛤

東流するものゝ則品川なり毎歳六月七日祭の時ハ南北牛頭天王ハ神輿此橋上ゆゑ行違ふ依て又里俗行違の橋とも唱へり

貴船明神社　驛舍南北品川の境中の橋の南岸海道より右り

ある相殿ゝ神明と牛頭天王を合祭も南品川の産土神なり

毎歳六月七日ハ天王の祭礼中ゝ其前日神輿を海中ゝ舁入り

後驛中ゝ假屋を儀けかゝふ神幸終ゝ貴布祢の祭

例ハ九月九日神明ハ同月の十五日なり神主鈴木氏奉祀も

寄木明神社　南品川の洲崎ゝ相伝ふ神代の昔弟橘媛

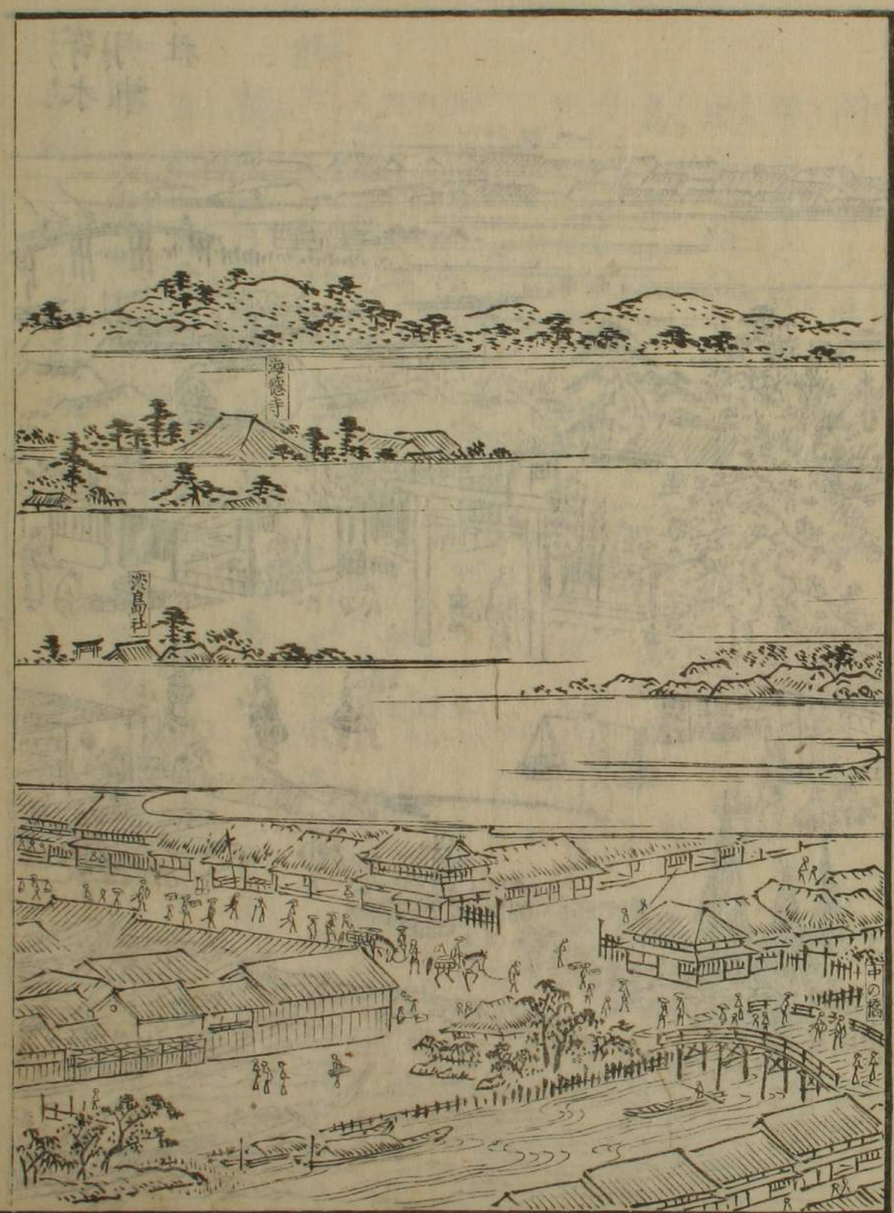
日本武尊と共ゝ王船ゝ乗し此海上を渡るゝ頃霞るゝ

その船材所ゝの浦ゝ漂泊し此地ゝ流るゝ寄りしゝ土人

一社ゝ奉しゝく弟橘媛の霊を祭るゝく寄木明神と号る又寄来ゝ

作遥の後船魂西宮大神を合殿とゝ往古源義家朝臣奥州

征伐の為東國發向の時此地ゝ馬を止め漁人ゝ當社の来由を


海蔵寺
沢島社
帝の橋

貴船明神社
本社

寄木明神社

問はせもよ漁人先の神傳を咎へ給へしかハ義家朝臣自親奉幣あらたく軍の勝利あらん事を祈まつるに奥羽の逆乱平治の後歸路の日再び當社に詣てられ兜を収め故に此地を兜島と号くるとを

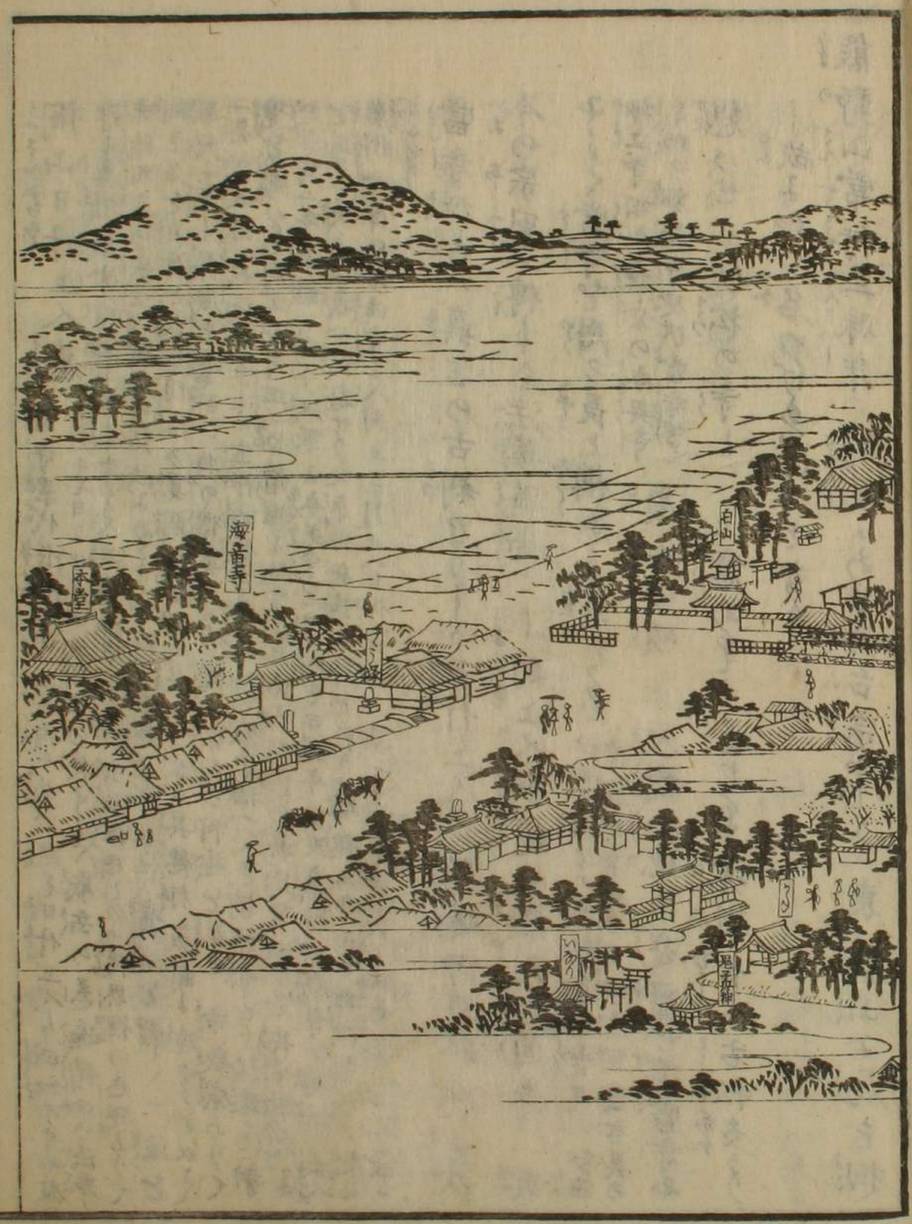
往古ハ今の伊殿山の麓より南北宿の辺ハ一面の洲にて漁家のこゝろ山岸に傍くありしとを後世洲の間に川の流出あるく今の如く南北に故に島又擂鉢の如き頂此神を号け一社と一社件の兜の紐を神幹とを一説に山の棟より細く海中へ出てる洲崎の形紐に似るに共に名付とも一社ハ洲の崎にあるく洲の崎と神と号け後に至つてハ洲の明神と唱へ又誤て諏方明神とのひ誤る此社ハ今引く妙國寺の鎮守とし當社の外に寄木の社と称するとの品川河崎等の間に往来云伝へるなり

閉此洲崎の地ハ往古より往還の船を改し所わく遠見の番所を居置北条又山内上杉氏の家々の制札数箇の條目を注せり今も猶此地何某の家に伝へり

経王山本光寺　南番場にあり日蓮の宗流やゝく京師妙満寺派の

觸頭江戸三箇寺の一室なり永徳二年壬戌二位権僧都日什上人草創の佛刹なるく則上人を以て開山祖と称を中興ハ日鏡上人なり本尊釋迦如来宗祖日蓮大士の像ハ作者詳ならす又境内鬼子母神の像ハ日蓮大士の作なりとをへを

本光寺
大竜寺
天竜寺
海竜寺



開山日什上人墓　當寺累代住持の卿墻の内に並び建る日什上人を始め三代の僧侶の法弟

奥州會津羽黒山東光寺に入其德十方に徧し玄妙法門を叢岳の慈遍僧正の法弟

末法相應の宗立ハ蓮師の弘法にあるを以て祖師の名を日什と改む同年の夏關東を巡り花洛に至る其德行聲聞に達するを以て

鳳凰に朝し昇殿を奏司中將の傳奏ゆへ謹て宗門の利益を奏し帝叡感ありて

二位摂政源義滿公を以て宣旨延長の沛内弘宗の勅免を賜ひ其年關東に

境を賜ひ同年七月正二位僧都に任ぜらる共年關東に

赴き同三年為國に至り此地に本光寺を草建し同三年癸亥京師妙滿寺を開創し

奥州會津の妙法寺に入同年二月廿八日化寂あり歳七十九と云へり上法華靈場記に出る

當寺往古ハ眞言の古刹なりしを日什上人の時蓮師の弘法を慕ひ

今の宗風に轉じて法華道場となし則上人創建の體用六箇寺の一負

やゝ當寺を用の長と稱する是なり六箇寺とハ所謂奥州會津の妙法寺遠州見付の妙法寺同國吉美の

妙立寺相州鎌倉の本興寺京師の妙滿寺及び當寺なり

慶安の頃大樹此地に遊獵の頃當寺に

憩ハせ給ひ松の寺と上意あるを以て境内背ハ古松多し

故に名付給ひしとなり

熊野山常行三昧寺　同所にあるを天台宗ゆへ東叡山に屬を相

傳ハ仁明天皇の嘉祥元年戊辰慈覺大師常行三昧を修

行し給ひし旧跡ゆへ則當寺の開祖と稱せるを本尊阿弥陀如來も

同大師の彫造なりといへり

鳳凰山天妙國寺　常行寺の南海道の右にあるを日蓮大士の弘法ハ

しゝ京師妙滿寺の觸頭江戸三箇寺の隨一なり

本堂日蓮大士像　天月工人授与の靈佛なり　五層塔　文安年間建立と云

多寶塔　毎歳十月十三日諸人に拜せ記に日教造營と云

諏訪明神祠　當寺の護法神なり此祠ハ先に記

明神と称せ後世訛て諏訪明神と唱へ又諏訪明神ハ狐狗狸と竟に

祠ともいふ〻しゝ来由を失ふに至る土俗の昔ハ社領の地海の面へ

十八丁四方ありしと云と　二王門　左右に金剛密跡の二王の像を置運慶の作

山王宮の二王なるハ山王宮後東叡山へ靈驗殊勝と云

駿河大納言殿屋敷の赤成門を引て建らる

此座なし一説二王なるハ當寺へ附しゝと云

東海道名所記に云妙國寺の門ハ

栗石を取江戸に出しゝ賣と云

總門

法華寺あり此寺の

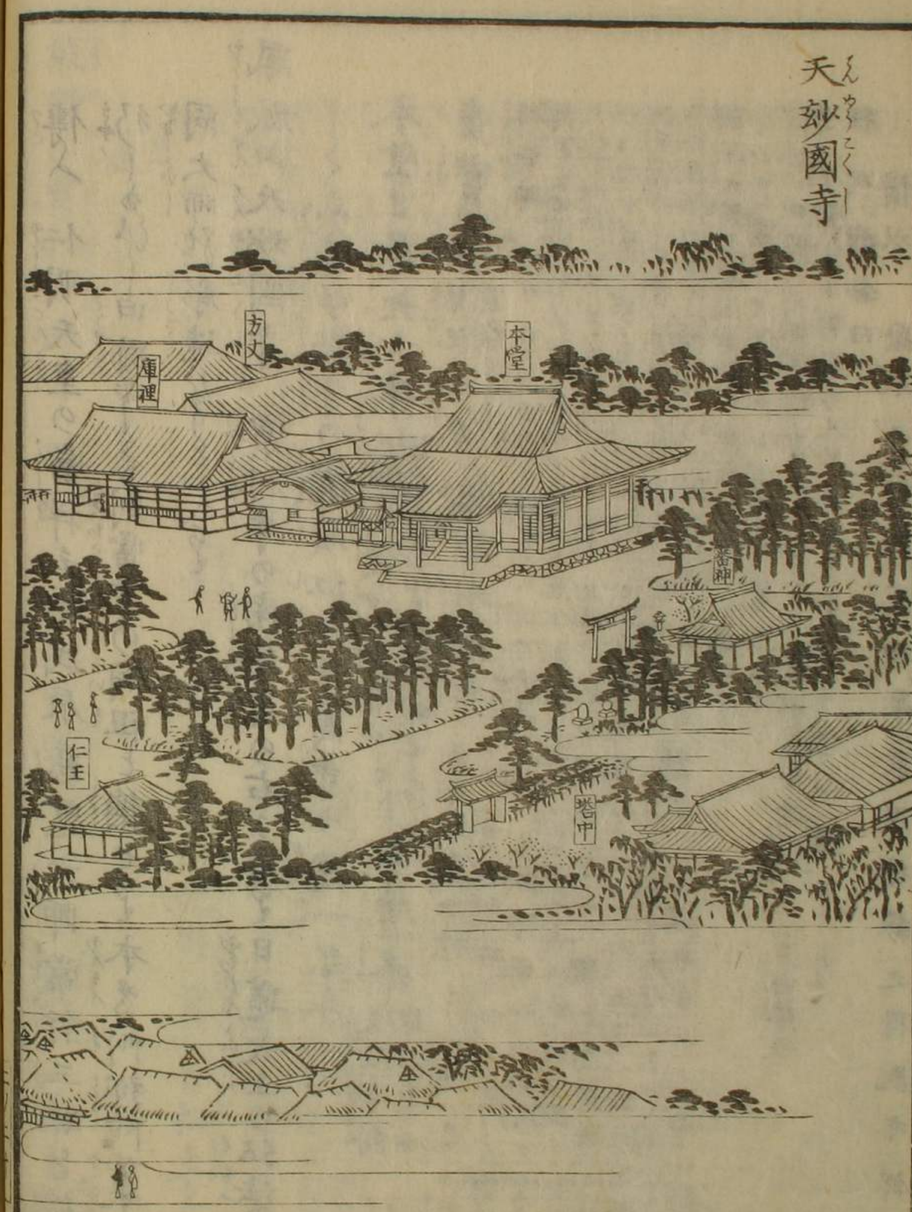
鯨鐘　旧鐘ハ文安中鑄治せしゝ寛永十八年鑄改しゝ之日鐘の

銘文に再造の人の名地名年号等を鐫りし

往代鐘銘曰

倩以聖衆之影向宛如華散風結緣之得脫亦似

巷中
多
仁王門
総門


天妙國寺
方丈
庫裡
本堂
鐘楼
仁王
巷中

日傾西一聽鐘聲召請三寶六道衆生發菩提心鑄
一口鐘祈三身之果善根廣無限功德遍有幾
大日本國武州荏原郡品川郷妙國寺住持法印日
叡
文安三年丙寅季冬中旬第三天
大檀那沙弥道亂
鑄師和泉權守貞吉

寛永十八年辛巳八月下旬
洛陽妙満寺三十三祖日延再興之
江戸住冶工長谷川豊前守藤原重次
當山十三代目
施主當寺一結諸檀那

相傳ふ當寺ハ弘安八年乙酉天目上人（中老僧の一員）草創あるし佛
場ゆゝく至德二年乙丑寺主日叡師東國の乱を避んゝ為且ゝ
弘法化導の志を達せんと寺院を廢し京ゝ赴くれし頃或夜乃
夢ゝ洛中いつくとかゝれと路傍柳の大樹ゝ鳳凰の栖るとゝる
覚ゝ後自思らゝく此瑞や正ゝ我道場を開くへき前兆ゝんと
直ゝ夜の明るを待ゝ急き洛中を廻ゝ西洞院三条の辺ゝ至るに

果しゝく大樹の柳の茂るあるゝ則夢ゝ應なりしゝく其地を開き
一宇を營ゝ鳳凰山青柳寺と号し日蓮大士ゝゝ天目上人へ附属
の大曼荼羅を安置し廣く妙經の法を弘む（其旧跡ハ花洛西洞院三条の南ゝあるゝ今都七名井の中柳の水と いふハ則其旧跡なり）嘉慶元年丁卯天下疫疾流行せ後小松帝
詔あるゝ師をゝく此災を除むゝ依奇驗の料として康應元年南北四丁
東西二丁社地を賜ふる然といへとも其寺院ハ德の大乱ゝ廢せる
故ゝ寺を妙満寺ゝ摂せ（彼大曼陀羅并ゝ蓮師親筆の一部一卷の妙経ハ妙満寺ゝ寄ハ）其後旧里を
慕ひ又武州ゝ至せ天目上人の靈蹟を興起し舊貫ゝ復さんとせ
其頃熊野鈴木の後孫沙弥道印（鐘銘道亂ゝ作る）品川領主鈴木光純
等叡師の誦演ゝ信伏しゝく七堂建立の財をとなせ叡師ゝ力を
をあらせ文安年間彼旧地を象ゝ則鳳凰山妙國寺と号け
當寺を開創せ（此文安永享の年号前後永享六年既ゝ妙國寺へ地境寄附あり上杉憲泰の證状ありしゝく文安ゝ
先立る凡十有餘年不審とせ）永享六年前の將軍義教公の執ゝ上杉憲泰

先境の由緒を挙此地の四至を定められ其外数通の判形の書あるを後天正十八年當國所打入の時
大神君當寺へ入らせられ止宿あるをしかるを後寺領を賜はるべく朱章を添らる江戸寺社領を附しめらる朱章の始なりとのへり又寛永十一年伊奈半左衛門を奉行として諸堂を営建おさしめられ院主日延を以て中興開山たるべき旨命せられ此時より紫衣を免さる以て永規とす

上杉憲泰

宛行武州荏原郡南品川之端芝原地之事

右依佛地之所望永代八郎三郎と所補任之仍四至境東南八大道堺西八田堺北荒居道ヲ陽堀堺以之竹木可調植者也仍宛状如件

永享六年甲戌五月十三日　　憲泰在判

妙國寺別當法坊

同　寄進武州荏原郡南品川妙國寺地之事

右彼地此間七八字不分明南者四波堀堺西者大々道堺北者塔中堺彼内畠同勢阿弥作畠一段并四郎ゝ寄進地ゝ寺家之内在之此外常金可作畠一段同東者海堺南者観音堂垣堺西者大々道堺北者大堀堺為金澤智光院殿法華菩提并為南小路雲光法華菩提永代彼寺ニ令寄進處之然間至子々孫々於此寄進不者不可有異儀仍寄附之状如件

永享十年戊午七月十八日　　憲泰在判

足利持氏將軍

武蔵國荏原郡南品川妙國寺之為相續所之状如件

享徳二年五月八日　　從四位下在判

當寺別當

制札　妙國寺

右彼寺為手軍勢甲乙人等盗妨狼藉之事停止之若至于違犯軍者可處罪科状如件

大永四年四月十二日　　氏綱在判

大地蔵

品川寺
本堂
方丈

其餘氏康氏昭等の證狀ありて前上総介定景中務少輔持助開善左衛門
禪正左第〇植草新次郎等の判形の書ありて太田資正大草加賀入道山中
修理亮伊東右馬允石巻勘解由左衛門南条兵部輔入道等の連判狀遠山
總景判形の書ハ数通あり毎年六月廿八日虫拂の頃、諸人へ拜し
海照山品川寺　同所南ハ隣る普門院と号を真言宗やゝく京師
三寶院ゟ属を開山ハ權大僧都弘る法印と号せり
本堂　本尊聖観世音菩薩　海中ゟ出現あるし閻浮檀金の靈像
世ゟ水月観音と称へる此靈像の利益感応のゆゑなるハあらじ
月の水ゟ景を写すことく成りとゝ以くかく弘る
藥師堂　中門の左ゟあり本尊薬師並ゟ十二神将の像を安置を弘法大師作なり　紫銅地藏尊　門を入く左の方ゟあり石を畳く
臺座を織く宝永五年戊子沙門正元坊
建立せる所やゝく江戸六地蔵の一員なり
本尊縁起云く　往古弘法大師東國遊化の頃此地の押領使品川
氏何某　此人ゟ附属せるゝ同左京亮迄其家ゟ伝へく来る信
せるを　左京亮の名ハ源倉　大草紙ゟ　遠の後應永ゟ至を鎌倉の公方足利左兵衛
權督持氏と上杉禪秀合戦ゟ及ひ一項品川の一族悉く討死す
其時かるハ深く草堂の内ゟ秘め置しを後太田左金吾道灌

品川の地を領せし項深く此本尊を崇信し一宇を建立しく
大圓寺と号ひ夫ゟ後又源倉管領上杉の両家不和ゆゑ
開東大ゟ乱る依く諸の寺社破滅せしゆ少かゝ永禄九年十二月
小田原の北条氏政今川家へ加勢ありく信玄と戦ゟ時信玄武
蔵の北の方ゟを不意ゟ押寄せ江戸城ゟひ品川を追補し民
家を焼拂ゟ此時甲州方の中ゟ竹森蔭村といへる二人の侍品
川観音の御堂を焼く本尊を奪ひ甲州へ帰るゟ其者大ゟ
狂乱し本尊元の地へ迄もへき旨威靈の示あるゝと武蔵ハ
敵地なるハ其便を如を一人の乞食の聖を頼し元の地ゟ還
座なるとゝへとも御堂も焼亡しくゝれハ其礎石のゆゑ
地を求めく形ちなりの草堂を営を造く安置なるしを
遥ゟ年月隔てく後兼應元年壬辰法印弘る堂宇を建立
しを海照山品川寺普門院と号ひ今来ゟ降普門示現の

千躰荒神堂

威力著く恵日の光煩悩の闇霧を破る感應の水月ハ長夜を照し給ふ

按ふ妙國寺什宝ふ存する所の永享十一年上杉憲泰寺境寄附の證文ふ南ハ観音堂坂を界とせとあ[illegible]則當寺の観音のすを云なるべし

千躰荒神堂　同所半町ばかりも南同し海道の右の方海雲寺也

ゆる禅林ふあるも本尊荒神の霊像ハ毘首羯磨天の真作ゆして昔九州肥後國天草荒神の原といふありしを邪宗門一揆の項邪徒等社を破却せ故あり[illegible]當寺ふ勧請せといへ[illegible]霊験ありとく衆人常ふ系詣す毎月廿八日を以て縁日とせ祭礼ハ三月十一月共ふ廿八日なり

補陀山海晏寺　同所一町ばかりも南海道の右にあり曹洞流の禅宗なり三田の功運寺ふ属せ北條相模守平時頼朝臣の開基として大覚禅師を開山と称し古山和尚を第二世とす天叟慶存和尚慶長元年丙辰當寺を再興しく中興也

海晏寺

題海晏寺紅樹

古刹楓林簇晚霞
深深庭院駐年華
那知秋後風霜色
却勝江南二月花

春臺

なる慶存和尚ハ松平因幡守康元の子なり天正御入國の頃三州より召し當寺を賜ふ日を臨済宗なりしを此時より今のめく洞家に改られし

本堂本尊鮫頭観世音

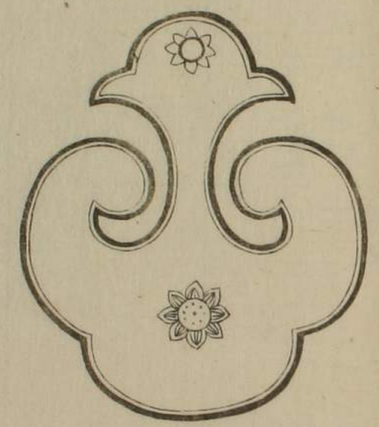
鐘楼

本堂の前左の方にあり元禄十五年當寺田録の災に罹て舊鐘焼損を依て宝永七年改鑄し往古の銘を其侭に刻せり

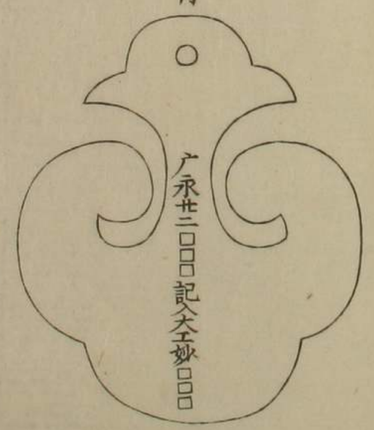
南瞻部州大日本國關東道武藏州荏原郡品川郷
補陀山海晏禪寺爰十方施主屢捨祥財聚銅金專
命良工鑄成佛器高掛層樓美哉堂々大器落々洪
音斯迺見色明心聞声悟道之因是故鳴鐘相念偈
願此鐘声超法界銭囲幽暗悉皆聞間塵清淨證圓
通一切衆生成正覚是以虎溪老拙厥銘曰
嗚氏炉鞴　四海九根　當陽掛起　法音千鈞
壱透碧落　響徹刹塵　驚破睡夢　忽性真
弘済群類　普結良臣　法輪常轉　佛日尚新
寶徳三辛未仲夏下澣　鑄師　定吉
且越　道琳　現住
再銘　存紹代
寶永七中夏上旬

雲版一口

高サ尺弐寸八分
横一尺寸三分　面
蓮花大サ二寸四分



背



北條相模守時頼朝臣石塔

本堂の前右の方にあり碑面に最明寺殿廿二日正五位下行相模守平元帥時頼と彫付てあり覚了房道崇碑陰に弘長三癸亥十一月

按に東鑑に弘長三年十一月二十二日松岡過去帳戊刺入道正五位下行相模守平朝臣時頼三十七最明寺の北亭に卒去とあり今鎌倉山内にある所の禪興寺といつる寺院ハ往古最明寺の旧地なる由鎌倉志にえたり當寺にある所の石塔ハ其模しなるべし石碑の形後世のものと地ハ

二階堂出羽守石塔

本堂の後の山腹にあり往古より當寺の門前ハ鎌倉海道なりと依て頼朝卿より北条家迄ハ執權の中門の守護として大森の辺に屋形を建て官人を置れしなり故に此出羽守も其頃品川の守護として此地にありしなるべし當寺香花院

按に二階堂出羽守三人をあり一ハ左衛門尉正五位下出羽守行義入道道空

と号せ文永五年閏正月二十五日歳六十六卒ス二八同従五位上出羽守
行藤正安三年八月出家しく道暁と号ス元元年八月二十七日卒ス歳五十
七三八同従五位下出羽守入道道蘊吉野戦攻の大将かゝ以上二階堂出羽守
三人あり何もゝ是然るを惣門の額に海晏寺と書せしと
寺僧相傳へく二階堂出羽守行氏の筆なりと行氏ハ従五位下隠岐
守に任し弘長三年十月出家しく法名道智と号ス文永八年六月七日五十
一歳にて卒
せし人なり

梶原平三景時石塔 同所に並ぶ景時謀叛を企く正治二年庚申正月廿日
甲し人等と一戦し竟に景時討死せるとの説
東鑑に見えたり是もうつしなるべきなり

北条左京権大夫平時宗石塔 同所に建る文永元年より特宗
宝光寺殿道果大禅定門と号せ 将軍執権次第弘安七年甲申正五位下相模守平時宗
三月廿日所労四月四日出家法名道果同日酉時死三十四云

楓樹 江戸丹楓の名勝ゆゑ一奇観なり晩秋の頃ハ満庭錦
繡を晒すごとく海越の山々ハ紅の葉分て見えたり蒼海夕日に
映しくを又紅を曜うめく書院僧房も其色よかゝやき此地遊賞
の人醉色なくさるハなし

千貫牡丹 佛殿の前にあり四方八間に栄えたり 江戸砂子菲梅千貫紅葉花紅葉茂笑紅葉
又八幡影向の牡丹とも号くるとも 猩紅葉なとと云あり千貫松 頼朝松とも又ハ龍
燈松とも号くるとも

今ハ枯て

龍淵 庭前の池をいふ 両渓橋 手洗池より架せ橋下の池を蛇の
身を変て二世古山和尚教化して 蛇の淵も此ほとり 流とふ建久の昔近里の女身を投て
畜身を解脱せしむとい方丈の庭の山を云北の方に昔を
蓬莱山 蓬莱亭と云ありしとかや

梶原屋敷 梶原塚の南に當る 石地蔵 弘法大師の作

権現御手洗池 延命水

明神森 山王社 八幡宮

海晏寺

総門額
二階堂出羽守
行氏筆

寺記云後深草帝御宇建長三年辛亥五月七日此地乃海
中より鰹一口漁夫の網にかゝるを揚れを腹中より正観音の
霊像を得るを此を鎌倉へ聞えしハ時頼朝臣希代ゝ
るとて是祥瑞なりとて補陀山と号し四海安平の義によりて海晏
寺とせらる瑞林瑞應廣正東悦等の四院をも造営あり同
六年の春諸堂落成し翌る七年入佛供養を修行を鰹の

地を鮫濵といひ又鮫頭崎ともいふ海の方へ百八十間余南北へ八町の洲崎なり依て鮫洲崎といひしよりて江戸砂子かあ

町東西十町の地を寄捨あり凡五箇の僧坊ハ百八十貫文を附せらる八十宇の房舎ハ巍然として甍をならべたる又天竺の靈鷲山ハ準へ南紀の高野山ハ擬しつゝひしつゝハ有信の輩ハ月牌を置石塔を建弘安五年ハ北条時宗願主として堂塔重修せれ月牌料として二十貫文寄附あり一となり殊更重罪の輩なりとも當寺ハ入者ハ其罪を免許せつゝき則を定めゝ山庫僧供ハ四方十里の間頭陀の免許あるもしとなる往古當寺開創の頃松槻各二千株を植洲崎ハ八幡三社を營建る其松の枝葉彷彿を覆ひて繁茂せしハ其頃郷童の唄ハ品川浦ハ名所なり海晏寺前のまつもまつ松御代もさうえくめでたよと祝ひしとなり鄙言挙さふ堪ものゝ

鮫頭明神祠　砂水の海濵ハ祭神詳ならぬ土俗傳へ云往古此地へ丈餘の鮫の揚るすありしハ其頃此地大ハ疫疾流行せうハ此鮫の祟なりんと恐怖して漁人其頭を一社の神ハ祀ると

按ル此祭神を鮫の頭とせるすハ恐らくハ海晏寺本尊の縁起ハ混しく附會せしなりへし或人云砂水昔ハ鮫洲ハ作りなると然しハ鮫洲の明神と祚へて

住なりん或冊子ハ云此所ハ佐美津川とく細き流の潮と交らもして佐美津とくなりとく名付しとのあり

上古海道　品川より池上へ行道大井より北の方東海寺南門ハ向の岱往古の品川の驛路なるもの其道筋大井荒蘭池上矢口とはきしきもの今も八景残もり又其辺の藪中ハ標の石今も存せりとなり延喜式大井驛伯馬のすハ證とすべし

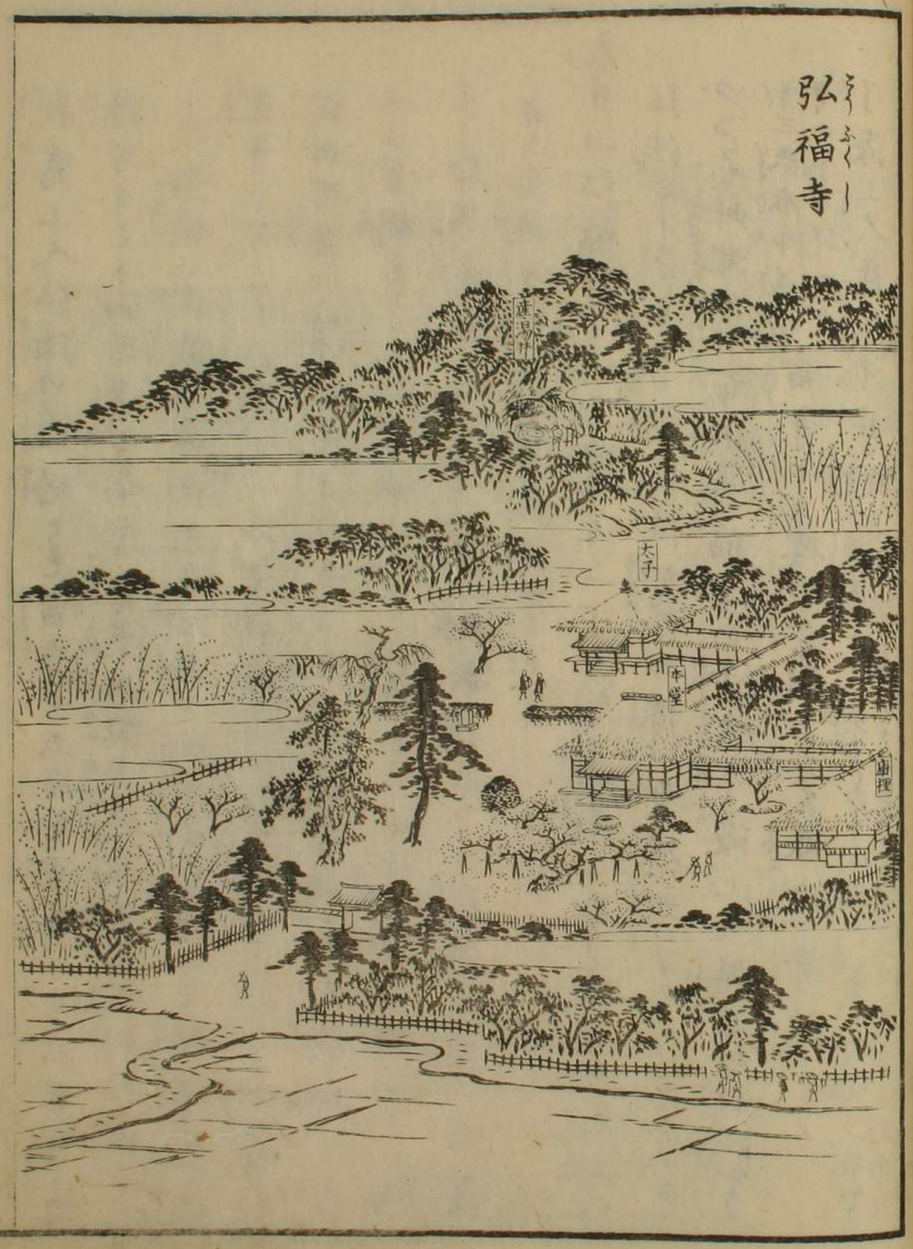
延喜式曰　諸國驛傳馬　中略　武蔵國驛馬　店屋　小高　大井　豊嶋　各十　足　下略

海賞山来福寺　砂水御林町ハ真言宗中ハ本尊ハ地蔵菩薩を安置を弘法大師の作　所文九寸八分なり　梶原氏の草創也則此地ハ其宅地なりとあるも縁起云此本尊ハ梶原氏代々其家ハ相伝へ尤霊威なり然ハ元亨の頃智辯と云沙門眼疾を患ひ此本尊ハ祈念しく不日ハ本快を得し其後世の中大ハ乱るハ本尊の所在ハ知れさりしハ文亀年間梅巖阿闍梨當寺より四五町西の方経塚といふる地やしくこれを感得せしとなり　経塚の来由ハ次ハ詳なり

来福寺
世の中を
うらやましくも
思ふかな
猪原堂
三昧堂
庫裏
延命院
鐘楼

さくらかな
雪中菴
蓼太
本堂
方丈
歌舞伎
猪原堂
不動
猪原堂

西光寺
本堂
庫裡



按ずるに當寺開基梶原氏と称するものハ小田原北条家の幕下梶原日向守なるべし永禄二年の頃六郷内新井宿の地を領せしむ北条家所領役帳にえんえんり是よりくゝ考ふる此所ハ日向守の采邑の地ゆゑ又其宅も此所にありしと思されども土氏お侍つく其宅の旧跡ハ来福寺あるひハ砂水松平土佐矣の別荘の地なりともいへり

延命櫻　本堂の左の方の庭前にあり　梶原松　同所にあり梶原氏手親栽る　梶原塚　寺の後畑の中にあり塚上に杉を植う此辺農民の構の中にも梶原塚と号るものあり是も其氏族の墓所なるべし其余一族の石塔當寺にあり

當寺境内櫻樹数株ありて悉く品を領てり弥生の花盛わハ遠近薫を慕ひくゝふ遊賞する人少からす

納経塚　来福寺より六町ばかり西にあり相伝ふ往古右大將頼朝卿佛経を書写なしたまひ此地に収らるゝといへり来福寺本尊地蔵菩薩此所より出現したまひし頃土中ゆゑ夜なゝ讀経したまひしとゝ故に来福寺中興を世に経讀地蔵尊と称せり

松榮山西光寺　同所二町ばかり南にあり弘安九年の開創なりといへど往古ハ天台宗ゆゑ栄順律師開山なりしとかや其後

親鸞上人弘法の道場とも當寺十五世を空善と号し若賀入道禪可よりも十四世若賀伯耆守從五位上清原真人元則の長子かして俗稱ハ武藏五郎西光又幼名を伯王丸と唱へも今當寺を西光寺と号るも此西光の名を摘て号けたるゝ寺寶に武田信玄の陣羽織と称するものを収む庭前醍醐櫻と名る老樹あり花ハ單瓣やゝ立春より七十日目の頃ろ開もゝ其余初とへの櫻の老樹數株あり滿花の節ハ奇觀あり此地第一の花の名所なり

大井山弘福寺　西光寺より一丁ばかり西南よあり當寺も鸞師の弘法ゆゝ本尊阿弥陀如来の像ハ聖德太子の作なりゆゝ

ゆゝ此地ハ麻布山善福寺の中興了海上人誕生の旧跡あり（第三卷麻布善福寺の下に詳なり）當寺やも櫻の老樹ありて春時奇觀あり了海上人産生湯井（寺の後園よあり少しばかりの岳の小横穴の泉あり横へ入る深しくもとゝ又當寺よ大井と

いつもあり邑名を大井と号し此井より起る人なり東鑑に大井太郎光長同次郎實春同三郎等の名あるも何れも此地より出る人なり

鹿島大明神社　同所一丁ばかり西南にあり社記に云く當社は安和二年己巳九月十九日常陸國鹿島の御神を迁し奉ると云く別當を尓現山常林寺と号し天台宗にして東叡山に属せり本尊は藥師如来慈覚大師作開基は尊栄法印なり貞和三年丁亥再興す了覚阿闍梨を中興と称せり境内櫻多く春時一奇観たり

本地堂　智證大師の作なりと云へり

古鰐口　別當常林寺に収む松女敬白とある上の文字よむべし按に福と云文字を鶴損るとの説あり其銘左のごし

奉寄進武州荏原郡大井郷鹿島宮鰐口
寛正二卑癸未十一月日　福松女敬白

鈴森八幡宮　同南の方繩手を隔て十町あり不入斗村にあり按に不入斗と号するものは和名抄に所謂餘戸とあるもの則是なり

神社とも稱せり　別當は真言宗にして八幡山密嚴院と号し

神主は森田氏なり

按に當社は延喜式に當國風土記殘編等にも載る所謂磐井神社是なり後世に至て祭る所の伊神も定めなき歟八幡宮を磐井に因て石清水に八幡宮を勸請せしなるべし

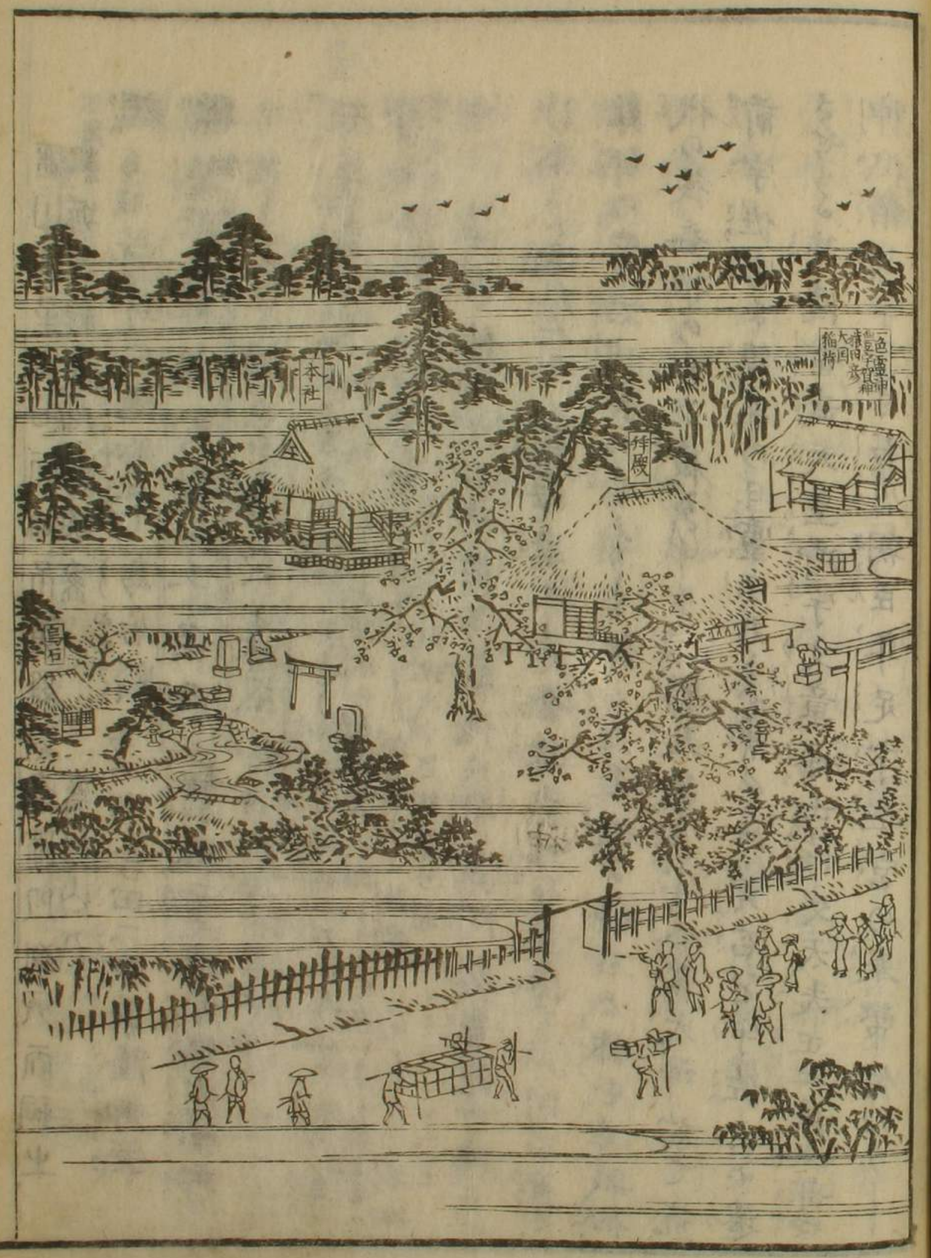
武蔵國風土記殘編云

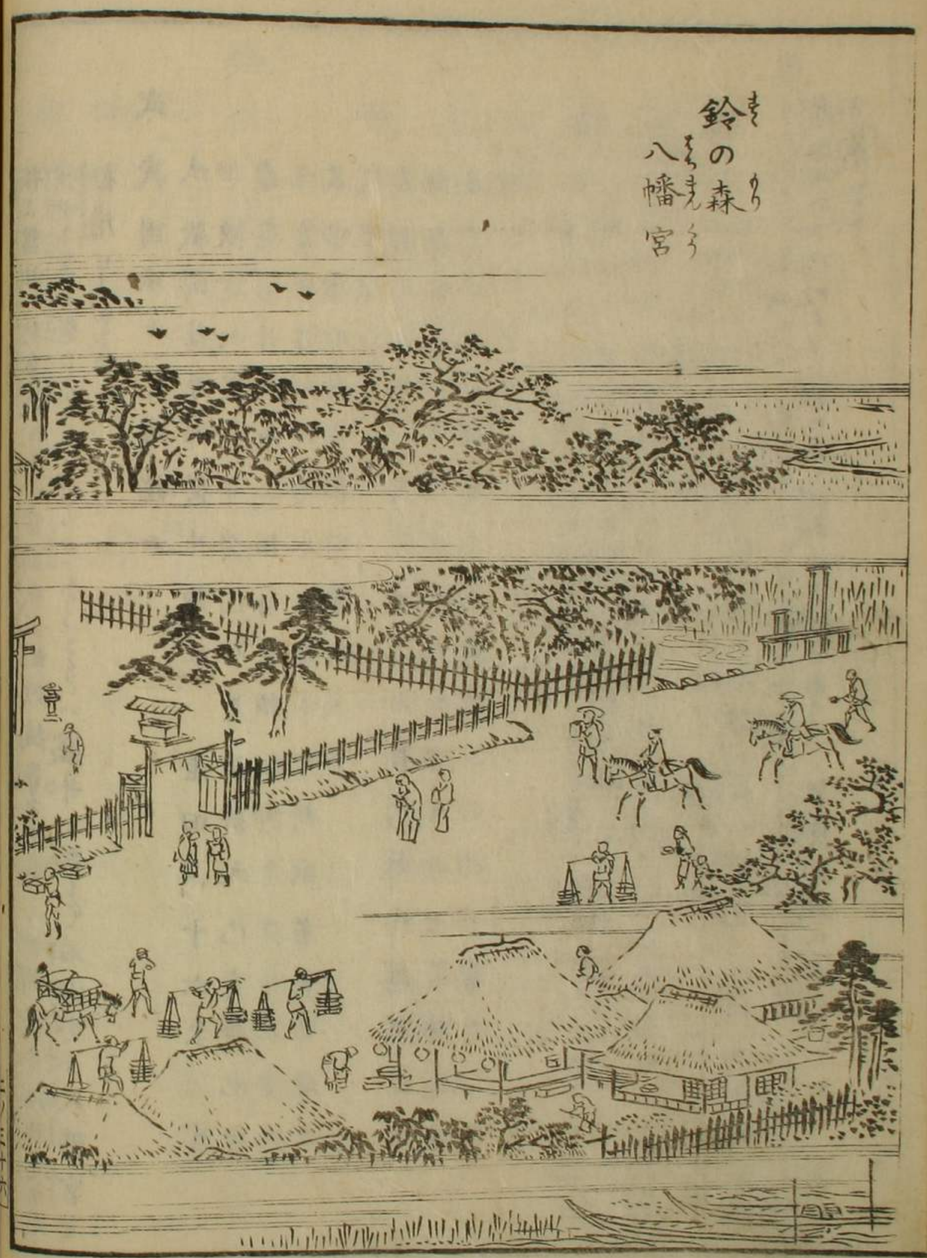
武蔵國荏原郡磐井神社　圭田三十六束二字
田敏達天皇二年癸巳八月所祭大己貴命也社
邊有磐井祈事土俗有妄願則御手洗井水變鹽
味事正直則如清水近國奇之祈病者取之服之
其功驗如神土俗曰藥水云云
代實録云
貞觀元年冬十月七日己丑幾内幾外諸國遣使
班幣於天神地祇去九月祈無風雨之災誠有感
激歳以有年仍賽之武蔵國從五位下磐井神列
於宮社云云

三

鈴石　當社にあり相傳に他の石を擊ハ其石鈴の音ありと當社傳記に此靈石のよりくに此地の名を鈴石森と云ふ後中畧して森と云ふと詳なり遠遠記行に此社に舊有一石轉之則其聲如鈴とあり或ハ云昔の石ハ賊の為に奪ハれたりと云

烏石　社地の左の方にあり四五尺ばかりの石にして面に黑漆を以て畫く天然の烏の形を顕ハせり石の左の肩に南郭先生の銘あり烏石葛辰是を鐫記せり葛辰自ら烏石と号し此石を愛せり發江戸砌子云此石舊麻布の古川町の三田の方へ移不の三辻にあり〻を後此地へ迁せりとあり古墓なり


本社
拝殿


鈴の森
八幡宮

匾 星冒石 而 吊 黄 維冒 書 佛 門 剄 所 而 祠 土
額 鳥石 阿野公繩卿筆 鳥居額 鳥石祠 吉田二位兼隆卿筆
聯 左右の柱に掲ぐ 梅小路四三位參議定福卿

龍蛇の珠笠島 雨 僊降蒼海於森風

石華表 六七町東の方今は海面となり中昔の頃迄は石の鳥居の柱のみ殘る水面に顯れ出ずあり〻〻宝永の大地震に折れ〻〻今は見えず上古は作の鳥居のあるは當社の境内あり〻〻後鬼波に欠損して元亀より万治寛文の頃迄海道度〻に甘誓に今は社地の中を往還の道路ともなるとつたへ社記曰往古神功皇后三韓征伐の時長門國豊浦の津より

自詠七首献備の中の一首

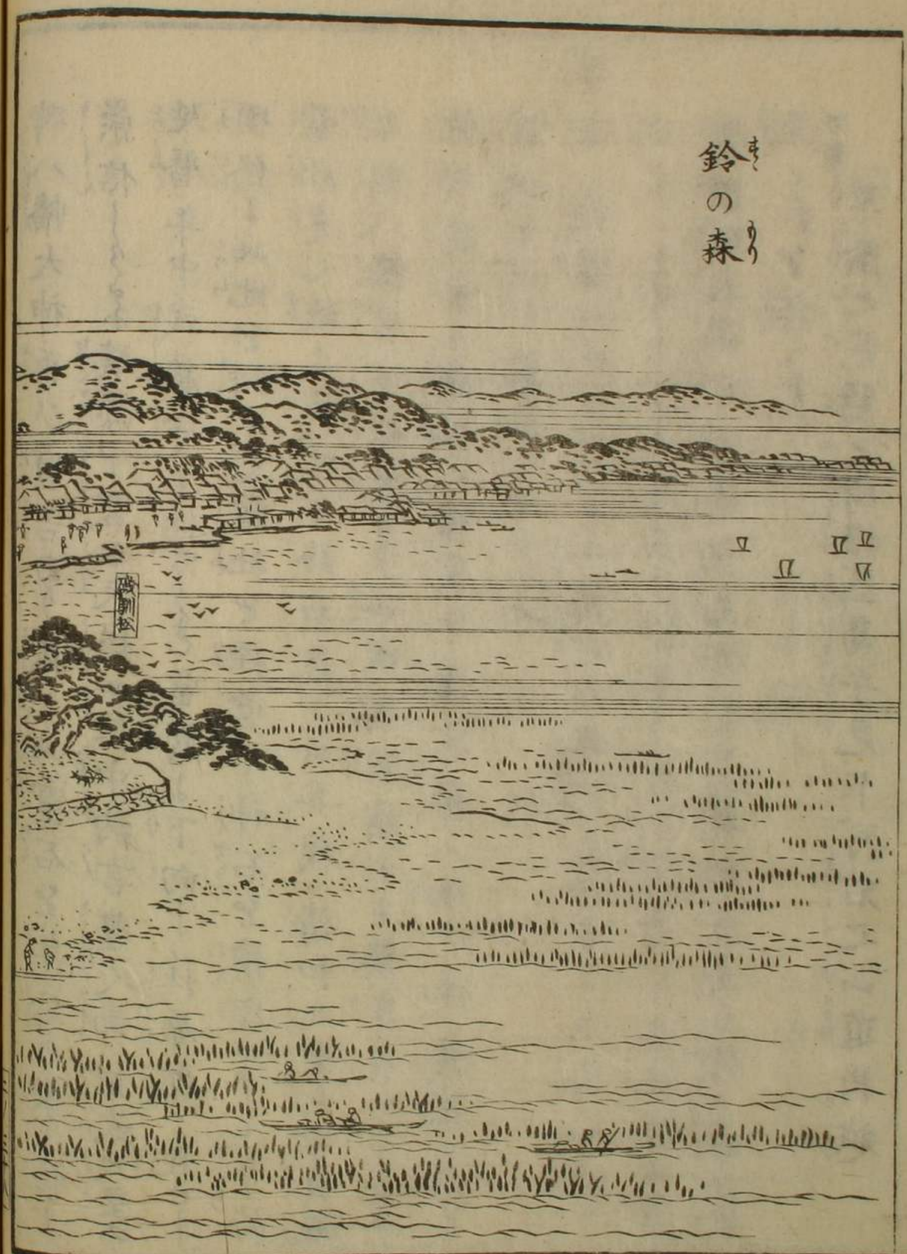
船に乗せられんとて其海邊にて含珠の神石を得たり則石青く雞卵のごとく石中鈴の音あり〻〻鈴石と称す異賊征伐の後香椎の宮に藏めたり故に鈴石と称す

前宇佐宮に鎮座の日靈示あらはれて此寶石を宇佐宮に遷さる其後聖武天皇御宇文章博士御史太夫正二位文部卿神祇伯勲十二等石川朝臣年足宇佐宮の奉幣使たり時に八幡大神再び靈告あり依て此靈石を年足の家に移し崇信〻〻ふ嫡孫中宮大夫從四位中納言豊人卿桓武天皇の延暦年中武藏守に任せ〻〻當國に下向し荏原郡に在せ〻頃終に此地を封じて當社を經營し神石を鎮座なし奉る當社是〻故に宮地を鈴石森と云其後清和天皇御宇貞觀年間八幡宮宇佐宮より山城國石清水に鎮座在とき六十餘州國毎に總社八幡宮を擇定賜ふ依て武藏國に於ては當社を以て總社とせとい〻

笠島 鈴森の地をいつる八幡宮の境内左の方に笠島神社と称せるものあれとも定あ〻〻祭る神六前豊宇賀姫猿田彦菊理姫天満宮淡島鹿島等なれ奥州笠島の神と等き欤未詳

万葉 草陰之荒蘭之埼乃笠島乎見乍可君之山道將越

鈴の森



秋の野はあるねの袴の裳をさしぬるはかりにて　為家

磯馴松　鈴の森の社前海道より左の方海濱人家の前にあり

當社の神木と称せ

荒蘭崎　同く鈴森の邊とも或ハ云木原山ハ景坂とも藻汐草に

荒蘭磯とあり　北条家の所領役帳に梶原日向守六郷内新井宿を領もとあり荒蘭を新井と作る今も此文字を用ゆ

此地も古の海道なり

續後撰　白波のあるねの袴裳に磯馴松かそなれぬきの人をこそ見　家長

夫木　沖津風あるねの袴裳に吹馴れて濡るるかな　今出川院近衛

四國雜記　荒まもるあるねの袴裳に磯馴て靡き波のもとの岸の松風　道奥准后

千五百番　沖津風あるねの袴裳に馴て靡き波のもとの岸の松風

沖津風ふく井の清水よりなかれのうもれもすの人を慕き　信實

鎧懸松　八景坂よりあり往古八幡太郎義家朝臣奥州征伐の時此松に鎧を懸られしと云傳ふ高さ六七丈ありて大さ牛をかくす枝葉柳條のごとく垂下りて地を離れること其間五四五尺に過ぎず尤比類なき古松なり一に荒磯松磯馴松とも呼ひ或ハ震松とも号く枝葉共に動揺ハ此地より望めハ海上眼下にあり美景の地なり土俗ハ景を誤りて坂と唱へり

八幡山行慶寺　大崎より東海寺裏の方戸越村にあり文禄元年起立浄土宗にて開山念誉上人戸越八幡兼帯なり願成院と号ス梶原氏什宝ありと

戸越八幡　戸越村鎮守なり天文年間の鎮座ありとの御正躰ハ聖徳太子の作本地佛阿弥陀如来の像ハ春日の作なり當社

八景坂
鎧掛松

境内の小石を疱瘡の守とせ靈驗ありとて土人是を拾ひ取る
歸る九月廿八日相撲あり

木原山　同後の丘山をいふ　木原氏の領地なる（分限帳太田新六郎所領の中六郷内戸越ハ梶原分云）

木原氏の系図を歴観せ云く木原氏姓ハ穂積祖先を鈴木掃部介吉行といふ誤り四代の後同苗平兵衛吉頼御當家ニ仕へ遠州山名郡木原ゆえ名ニ貫文の地を賜ふる其子を七郎兵衛吉次と号ス其米邑木原ニ住し普請方を勤む然ル天正三年二月十八日台命ありて在名をとゝ鈴木氏を改め木原と号せ同十八年江戸城打入の時武州荏原郡新井宿村ゆく四百四十石をたまふと云云

荒蘭宿といふ　地なりとそ　古哥ニあるあゝぬの浦は笠ゐをえつゝ

ゑゝ山越ら笠ーとあるゝそ則此所のゝ　なるゝ　能野社

又池の中島ニ辨財天の叢祠なるあ案　此宮を土民小野小町の宮なりといふ其拠所を

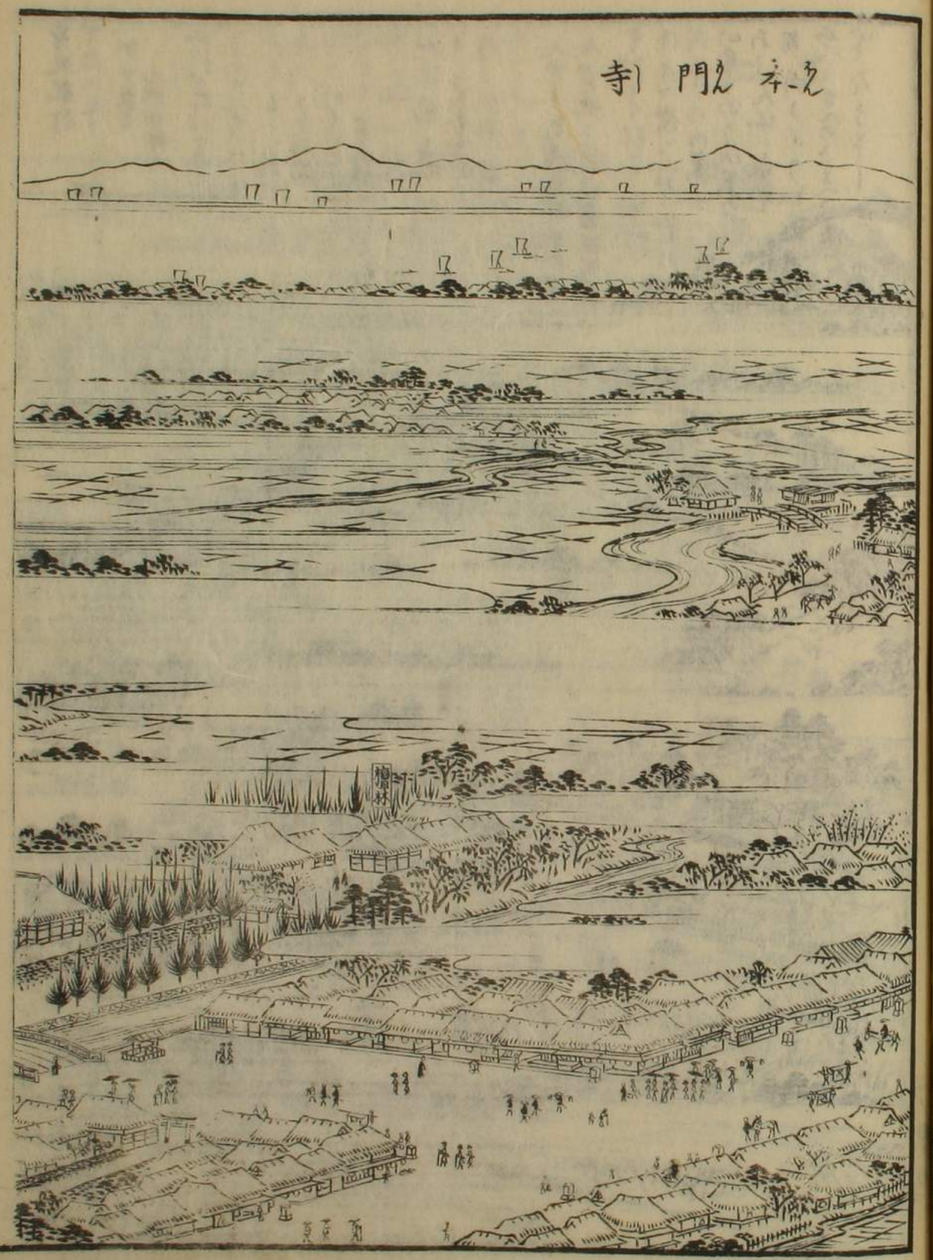
醫福山桃雲寺　同所山際ニあり　徳門ハ東向ゆゝく海ニ相對す

眺望八景坂ハ同し　此寺前崖下の耕田背ハ海ゆゝく此崖下迄浪を打寄たりしとなり其頃ハ上の道を往来せし

當寺ハ曹洞汎の禪林ゆゝく中古此地の領主木原氏の祖木原十郎左衛門吉次

慶長十五年庚戌極月十一日卒ス　桃雲浄見居士中興せしとく境内ニ墳墓あり碑銘ハ林羅山先生撰まる所なり　當寺昔ハ滝泉寺と云

福田山蓮花寺　蓮沼村ニあり　此地ハ六郷ニ属し永禄二年の頃雑田新三郎領し北條家の所領役帳ニ見ゆ　真言宗の古刹ゆゑ荏原郡の地頭荏原兵部有治と云し人出家して蓮沼坊と號し當寺を創立せし本尊十一面観世音菩薩の像ハ行基大士の作なり往古ハ巍々たりし巨藍ありしが地頭行方彈正忠日蓮の弘法を崇信し他宗の寺院を滅却す　行方彈正の宅地ハ六郷八幡塚の辺なり同巻次第ハ



大士を以て開山祖とし文保元年丁巳六老僧第二位日朗上人
當寺を修造して大刹とし於て諸門徒推て開基と称し

日朗上人ハ筑後公正法院大國阿闍梨と云姓ハ源父ハ新羅三郎義光の子南総
平賀の住人次郎盛義四世の孫平賀有國の子なり十歳にして出家文永八年大士ホ文保
後竜の口の土牢より箸いらし同九年佐州より至て弘安元年上足の第二となる
二年北条時宗の命を受日叡と共に諸宗の徒と法義を論ずる利あり元応元年
正月廿一日池上より京を世寿七十八卯花園漫録に云文保年間とい人者昔ハ武士利時代
禅宗ゆく玄門より入門とい人意ゆく立しなり古へハ玄関の上の廊下迄下駄草履老
あり〜の古風のゆく京都ゆく皆ゆくあり〜と古老の人の物語なり今池上本門寺おそかくの

祖師堂　惣鹿子宝永七年寅十月十三日炎上もと云〜正徳三年渡辺幸庵老人對話
記ニ此炎上を十日夜ノ火ト云源武鑑ニ弘治元年十月北条家旗下加地
右馬頭顕季一揆を起せの時此本寺諸堂日蓮大士像弘安五年十月十三日
回録ニ及ふ〜〜日同上人再建す大士化寂の後七ヶ日漢三才図會ニ當寺
あ〜る日同年十一月廿九日日法上人彫刻ありしとめり又和
宗祖大士の木像ハ大士存在の日日法上人其側にあり〜是を作る云〜

額　祖師堂　太虚庵光悦筆　釋迦堂　當山第二十五世日顕上人の
本尊釋迦如来　地涌ひ四菩薩の建立なり祖師堂の左ホ並ハ
像ハ共に運慶の作なりとい人　額　釋王殿　伏見親王真蹟　轉輪蔵
祖師堂の後にあり　鐘楼　同題目堂　同楼門の左にあり常に法華
一切経を安置　の首題を唱へ〜怠慢なし
鬼子母神　妙見堂　楼門　石階の上にあり下の左右に金剛蜜迹の二像を置
行基菩薩の作なりとい人古川

其二

身延記行
万治二年
深草隠士
元政法師
人世水智音 追師斯再尋
今宵池上月 依舊照天心

其三

額長榮山光悅筆　五層塔七面堂　宝蔵　客殿の後にあるも

檀所は南谷にあり南谷檀林と云ひて日蓮大士茶毗所同所の山際にあり学寮あり此後の坂を朗師坂と唱ふ此地は往古池上右衛門の大坊と号し大士入寂の後宗仲居宅なり今其旧跡に一宇の草堂を建てあり狩野探幽法印の墓碑同所にあり碑文は羅山先生撰狩野家歴世の墓碑日蓮大士終焉旧跡本堂より西の方にあり

九老僧日澄上人に附属し一宇を建て大坊と号し本朝三大坊の一員なりと号す今故ありて大坊と号し長崎山本行寺と号す

弘安五年九月宗祖大士宗仲の宅に入り給ふ誠に盲亀の浮木に逢ひ我家に入り給ふ誠に盲亀の浮木に逢ひ止々々悲歎のあまり影を遺さむるを求む上人夫婦の深信黙止し難く終に託して自姿を鏡に写し影堂の拝殿に安置せり故に世人鏡の影と称す

同臨滅度時竟柱に影堂の項寄かりて往生せり

硯井同庭前絶壁の下にあり諸泉冷々甘美なり弘安五年九月大士請一早我臨終の期既に三七日の中にあり宗仲宅に入り給ふ同廿五日諸弟子に佛像経巻等を門弟子に譲り給へと仰せ井の水を汲み硯水と臨滅度時の祖師一代の特の秘記を認めたり

旅立御影同所に安置せり弘安五年壬午九月八日鎌倉比企谷又此水を以て光僧等に授へ給へり其項宗仲に造立せんと宜ふ則日法上人是を作る寂光の都へ旅立ち給ふ

池上右衛門太夫志宗仲墳墓同所右の側に建石の玉垣日澄聖人弘安

六年癸未九月十三日とあり同一房より妻女の墳も並び立て法号ハ日明上人授与

池上右衛門大夫宗仲一より宗長と作る姓ハ藤原氏禁闕四部官の一中一建長

年間宗尊親王より後ひ来り鎌倉に住へ邑を武州池上の地に食む嘗て弱冠

元年丙辰八月鎌倉中騒動大士の宗化を相謀りく父を諫む遂に父も又共に大士の

きく怒て逐ふ然しく宗仲弟坊[illegible]

宗化は帰宗仲毎歳供を身延山に送る其孫裔大師河原村住

十三日旗曼荼羅記をはくる其孫裔大師河原村住

連縁とく彩茂せり一説に云く宗仲ハ世の工匠を業とし鎌倉に住めると

坊舎三十六宇

大坊ハ九老僧日昭上人住せる黒彩院ハ六老僧日澄上人へ附属あり南坊ハ六老僧日昭上人

僧日像上人在せり是をあらせく惣門石階の下額本門寺光悦筆

当寺古跡の四院やしい

寺寶註法華經四卷

宗祖日蓮大士弘安元年戊寅徒弟の望よりあ

後日昭へ賜ふ由傳記に曰く当寺に四巻の[illegible]を伝ふ残四巻ハ豆州玉澤にあり因て[illegible]

項当山日恒[illegible]

宗祖日蓮大士遺物目録簿一冊

上[illegible]十類[illegible]檀那等へ賜ふ身延山宗祖廟当輪番次第

徒弟[illegible]遺物の目録中七則大士の更筆あり

[illegible]番の次第

宗祖大士親筆消息數通同大士所持念珠一連肉付

[illegible]帳

齒骨一枚

骨堂にあり方治二年深草元政法師身延記に曰く骨堂を拝む肉つきの歯も此内にあり此歯ハ我生身常に

貞宗太刀一振

勸化簿一冊

深草元政法師是を撰ム

草山集に云く

修池上本門寺知識文代

蓋聞時運長久佛刹隨興世界荒凉僧藍共廢斯以

眞諦由俗諦顯佛法藉世法成矣世尊以佛法付囑

國王大臣及有力之人良有以也池上本門寺者高

祖大薩埵草創之名藍而涅槃之也地星霜交遷

廢屢變方今祇園七重之幸華構寢就衰微鶴林

興風既屬寥落而今遭長久之時佛刹僧藍

樹之四海不啻修故乏能叙新唯有此寺猶如

輪奐不能培養不足粃糠雖如山岳別付而其

花木寂寞獨不花是豈非怠乎遇春蓋

夫法依人興人乎我處住之為宗人法也法處

依人則一本地久成之人乃貴靈山別付之法

獨在住兄人依處尊人貴故個處之尊

豈可身付諸荒蕪哉寂且光吾法妙也故為人妙貴人

福人即一成佛自其居則常我報土直法觀之此造土新是也人

教諭人最修一寺造宜修諸經之中往報寂光也耳昔佛言僧造新不處人

政寺言勝也寺以往報也之也又神言造僧造新渡不處人貴

禍之諸寺造宜故寺之中我常寂光也耳昔佛言僧造新不處人貴

為施莫造伽藍意欲襃往報寂光也耳昔佛言僧造新不處人貴

荒莫政此之為施大然夫修襃往報寂光也耳昔佛言僧造新不處人貴

政此之為施大然夫修襃往報寂光也耳昔佛言僧造新不處人貴

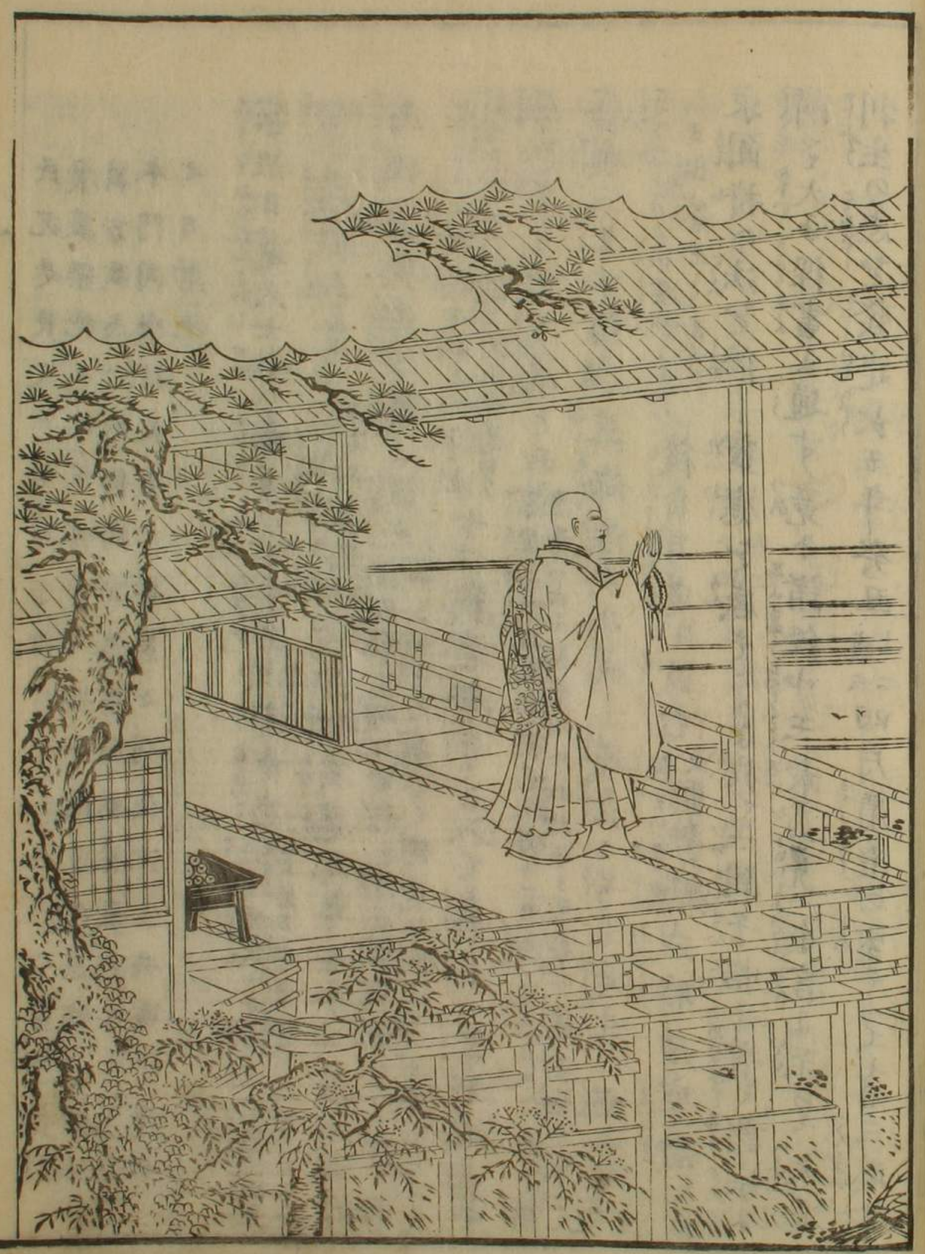
凶故年寺饑造歳伽藍其修福造非以唯救斯災

対面たまへとゆんのうまへるとそく日既る愚中かゆぬいまと

見かちちく切る云云

紫石靈鷲山より

建長五年四月廿八日
時蓮上人房州清澄寺
にて旭に向ひ初め
題目の七字を唱へ給
ふハ枕文ふ



民況是長久之世昇平之時乎因茲乃今普叩擅門
廣募樂施正欲報佛祖之德酬國家之恩諸人傾誠
萬方致志一振鶴樹寥落重興祇林衰微人々入此
本門同樂於長遠之壽箇々到彼池上共遊乎清京
之日者也

宗祖日蓮大士姓ハ藤原父ハ貫名次郎重忠（始三國氏と也重忠ハ遠州刺史貫名五郎重實の二男）
母ハ清原氏なり（一ハ畠山の氏族とも山崎左近慈五位兼良の女）貞應元年壬午二月十六日
房州長狹郡小湊ハ生る（其母常ハ旭日を拜せ或夜日輪懷胎ハ試もと夢て後孕む故ハ善日麿と名つく）華ハ乘し其
（大士降誕の地ハ一宇を創立せ所謂小湊の誕生寺是なり）十二歳清澄寺ハ入て真言の業を道善ハ
学び名を藥王麿と云（宗要抄天福元年癸巳五月十二日初て寺ハ入とあり清澄寺八大士初發心の旧趾なり）虛空藏菩薩の靈場
嘉禎三年丁酉（歳十六）落飾染衣受戒し蓮長と号し是生と唱ハ（道善命る）
（所の名宗要抄ハ十月八日出家もとあり）後自日蓮と改む（延徳の奇瑞あり又靈夢の應）或時虛空藏ハ
求聞持の法を修し靈應を感もてハ於て一聞千悟し普く諸宗ハ
濟ふ大ハ徑書ハ通す竟ハ諸經中王最為第一金言ハ至る大道
利生の志を發建長五年癸丑（歳三十二）四月清澄の室ハて七日三昧ハ

入同廿八日旭日ハ對ひ掌を合せ始て法華題目の七字を唱ふ（是本化上日弘法の權輿なり）故ハ道善忿て清澄を逐ふ同五月（或八四月）相州松葉谷
ハ移る住ス同七年乙卯（歳三十四）註法華經を著し（正嘉戊午駿州岩本の實相寺ハ入て大藏經を閲し一代大意を著ふ）又文應元年庚申（歳三十九）立正安國論を編ふ（中山安國論後記ハ云く文應ハ終ること云云）
時頼ハ捧く然といつとも其書諸宗を謗る憍慢の文あるをもて七月十六日宿屋左衛門光則ハ就て是を前相州平
是をとゝめ却て大士をして豆州伊東ハ謫せしむ時ハ弘長元年
辛酉五月十二日なり（此先文應年中總州ハ遊ひ大士を居らしむ則大士最初佛法綸の道場ハして今ハ中山妙法華經寺是なり）同二年壬戌（歳四十）時頼悵然として感もる所あるをもて翌年
癸亥五月廿二日牒を下して大士を赦も依て復鎌倉ハ歸る（文永元年甲子歳四）
十三八月大士房州ハ下向安公妙蓮尼同十月三日死師ハ祈誓あるゆゑ蘇活あり）
同十一月十日同國小松原ハ移る（東條左衛門平景信大士の他を悪むて此夏大ハ早も大士）
小松原をつゝむ大士をけて市の場の富中ハ入又同六年己巳文永八年辛未
手書の妙法一本を富士の巻の半服ハ埋む今往の拳
鎌倉靈山の崎ハ至る雨を祈らんとする題目を唱ふ奉る
経文を誦ハ校ハ書して海ハ投も果して感應あり官議して云く日蓮事を佛

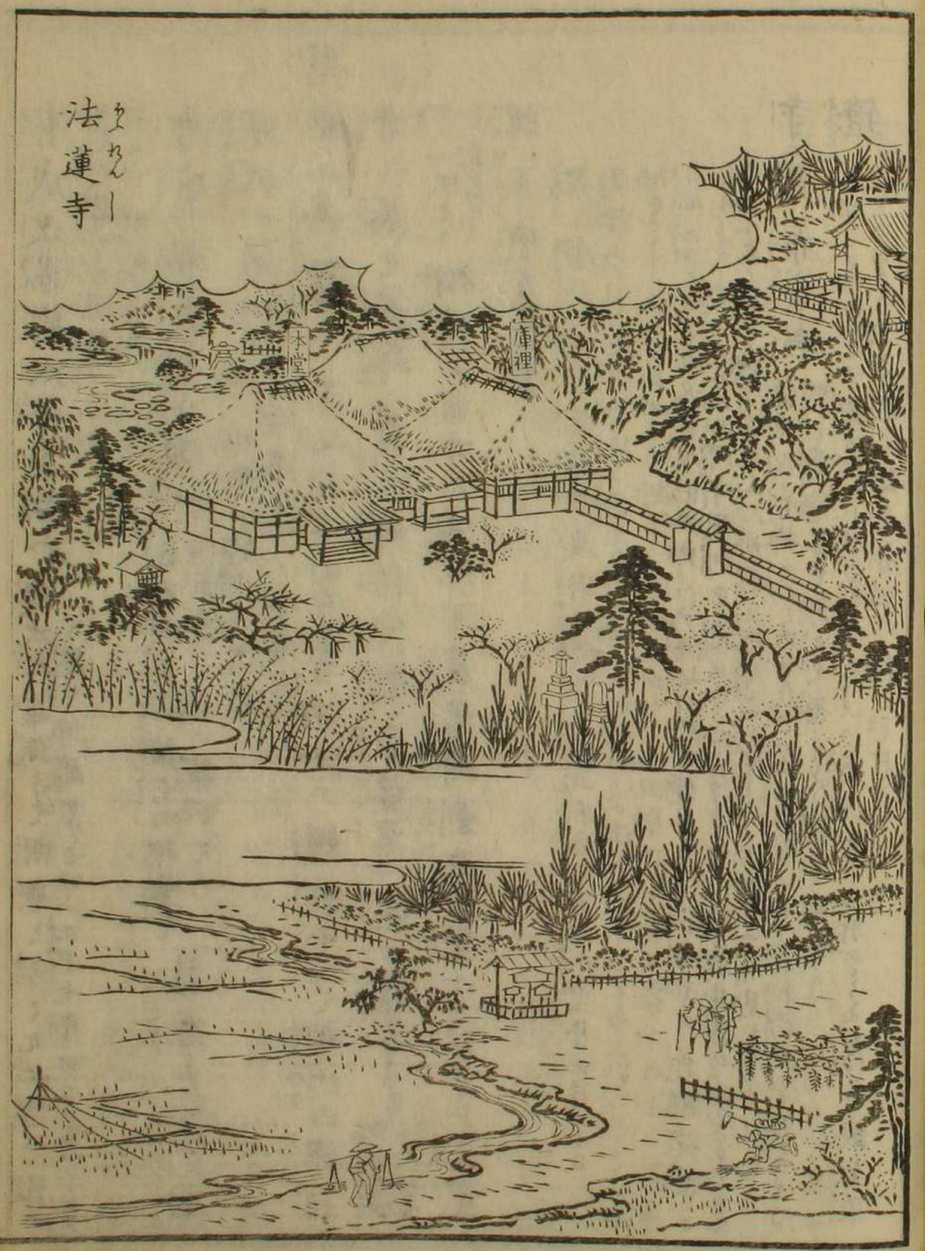
法に托して國家を乱さんとも罪なくして死に中まりと依く同年
九月十二日執権時宗頼綱に数百の兵士を添く松葉谷に發向せしめ
大士をかくめ捕ると又日朗等をもへく六人の輩を地牢に入其夜龍口に於て
大士の頸を刎んとせれとも（同頼村寂光山竜口寺其旧跡なり此時一老嫗あり鮮を盛来て悲く泣く是を大士に供せと此す五百余歳世俗の口碑に伝へる旧説に此老嫗は稲荷の神化を示すと云）霊威あるを以く執権時宗大に驚死を宥め
佐州に謫せ（鎌倉より高祖を免せの使者と龍の口より怪異を告んとする使者七里濱にて行逢う依て其所の水流を後人名つけく相逢川と唱ふ）
又同十三日本間重連の依智の家に至りぬ其夜辰星庭前の梅樹の上に降りて光を放つ其霊此を焼しく星梅山妙典寺と云同十月二十八日佐州松ヶ崎に着船あり其海上角田の水面に高祖棹をめてし経題を書しあり文字の象波間に微しく自ら龍蛇の動くるの勢いあるを入呼んで潮の題目とのふ又同年十月朝日大士佐州大野の塚原の小堂に入る霜雪を犯し翌る壬申年正月十六日信越あり奥羽の僧等と大に問答せ同十一年甲戌歳五十三再ひ霊威ありあるのみにて遂に執権時宗大士を赦せ依三月二十六日鎌倉に入
同五月十二日甲州身延山に隠栖せんと鎌倉を發し同十七日かしこに
移て草庵に入る（其先同年五月二日王府より獲法の牒を下しぬ又其頃大士石和川に行石を水底に投し鵜飼の鬼を化せ）
其地幽邃なりとせとも四方歓ひ慕ひく来て集る者雲の如し
故に其室狭くして衆を容るるあたはす依別に一堂を建て身延
山久遠寺と云誦経観念十年一日のごとし（其頃七面の神一女と化し来て道を守護せんとを誓ふ）
弘安五年壬午宗祖齢六十一其秋微疾を患ふ思ふ旨ありとく
同九月八日身延澤を出く同十八日此池上の地に移り右衛門太夫
宗仲の宅に入（宗仲後に家を寺とす今の大坊是）同廿五日より安國論を講しぬ
講畢るの後衆に告て云く吾三七日の中に化せんとも悲達太子を
技提河の辺に八十歳の時涅槃に入ぬ我も又當國田波河の辺
にて滅せんし若地震せは是其期ありとのたまへ又日朗に語て曰く
吾入滅の後墓所は必身延山に築へしと云こ嘗て十月三日親ら
本迹大要を書し立像佛（弘長元年大士豆州流居の頃田舎室に居る所の立像の釋迦なり世に随身佛と称せ此なり）安國論官牒二本を
附属する所の項邑主伊東八郎左衛門尉朝高大士に
海中より出現のり附属書注釋に詳なり今洛の本國精舎あり
併に同年五月二日護法の状と同年五月二日護法の状と官牒二通いまこれを考へも按に文永十一年二月十四日勘氣
赦免の状と同年五月二日護法の状とをいふ〜ん欄
同八日上行附属の法門を弘めん為に六萬恒沙の春属に像り正しく

上足六人を定め（所謂日持・日朗・日頂・日向・日興等の六老僧なり）且衆に命じて云く吾没後六子を見るべし猶吾を見るがごとくせよと（同十二日諸子問訊を遺訓淳々然たり既にして侍者をして自ら筆を執る所の大曼荼羅を懸しめ焚香散花持誦愈つとめ十三日黎明に地震ふ諸弟子皆来り集る大士衆と供に方便品を誦し入仏知見道故の句に至り睡りを寂を示しめす（或人云く壽量品の半に至る本門寺共日地やく往古の宗仲の宅地なり）世壽六十一法臘四十六葬儀禮に遵ひ山中に闍維し林樹変衰しぬ人をして鶴林の想あらしむ（同十六日又十一月廿五日に云遺骨を収め身延山に送ると云云以上宗祖傳の要を採る記も之を大士編述の書凡四十有余部）

千束池　本門寺の西一里余を隔てゝ長東西へ三丁巾南北へ五十歩ばかりあり　土人云往古此池に毒蛇住む後七面に祭るとゝ又池の側に日蓮上人の腰を懸しと称する古松一株あり

中延八幡宮　中延邑に在り故に号とも別当八日蓮宗にて八幡山法蓮寺と云開山を越中阿闍梨朗慶上人と号く相伝に当社の神像は源頼信朝臣寛仁年間霊夢によりて感得ありしとゝ長元三年庚午朝敵千葉介忠常追討の時源頼信朝臣頼義朝臣陣中に移し奉り敵を亡しぬ其後永承六年奥州安部頼良乱を發し又清原武衡家衡反逆の時も共に頼義朝臣義家朝臣鎮守府将軍として奥州へ發向し亡しぬ此御神の衛護による所なり崇信浅からず累世源家に相伝もこゝに荏原郡の領主荏原左衛門尉義宗と云人あり（姓は源なれども八幡太郎義家朝臣の遠裔なり）代々此地を禄に依て中延を氏とし又此所に舘せり康元元年丙辰鎌倉に於て日蓮大士の宗化を聴直に檀越となる其家に此神像を蔵む嘗て霊夢を感るの後文永年間日蓮大士を請しく法華経を法味を以て一社に勧請し奉り自記を作て其子左衛門尉

千束池
袈裟掛松


法蓮寺
本堂
庫裡

中延八幡宮
本社
拝殿
鳥居

有成次男德次郎より与ふ　德次郎薙髪して朗慶と号く九老僧の一員ふ
化也則當寺の開祖　して越中阿闍梨といふ正中元年甲子二月二十九日
墳塔もあり

寺寶　頼義朝臣譲状　義家朝臣へ八幡宮の神像を　荏原左衛門尉
譲状一通　是も同し神像を越中阿闍梨へ附属あり時の譲状なり
附属の證書ゆゑ真書なり

慈眼山萬福寺　馬込村よあり曹洞沢の禪林ゆゑて相州の德翁
寺よ属也本尊ハ自然銅弥陀観音勢至一光三尊なる　中尊長二尺余左
右ハ一尺ゑ　相伝ふ當寺ハ梶原平蔵景時創立の梵宇なりと云霊
宛あり

牌并墳墓あり

按ふ霊牌の表よ萬福寺殿前三州大守香山不捨大居士正治二年正月二十日と
是疑ふらくを後世造る所ゆゑ鎌倉時世かゝる法名あるを怪ふ大居士と云ふ
附ふるものハ遠くぬ世より起る　小田原北条家の幕下の士よ梶原
三河守と云あり又梶原助五郎江戸馬込の地を領せる北条家の所領役帳よ
寺僧ゆゑ誤ふ伝ふるならん景時三河守開創の寺院なるゝ景時最其名の秀るを
寺僧ハ景時三河守よ住せしゆゑ古書よ所見なし

寺寶　布袋鞍　梶原氏所持の　蒔繪とも角々損しく甚古物なり
鐙　今世よ　形ち鐙の如く小形ゆゑ泥ちりの所のゝふ巻き鉄を張
しとのゆく至る　云　鐙　鎌倉時世の物とゝ云

陣貝　右大将頼朝卿富士の裾野よ狩
頃のありしとい云へ

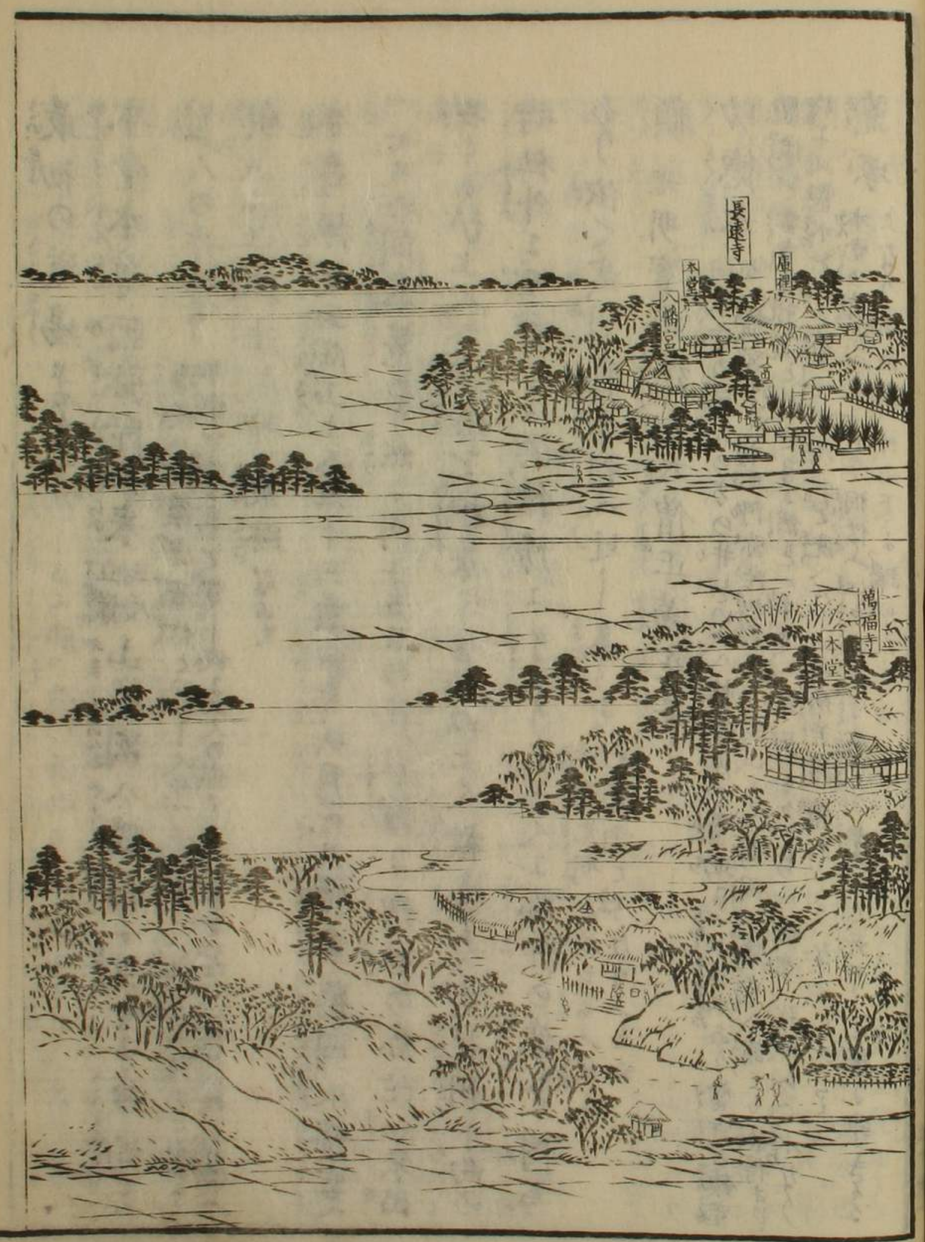
梶原氏肖像　座像にして長一尺五寸ゆゑ烏帽子を戴き大紋の女きを着也
面貌勇猛ゆゑて対侍の形容なり　寺僧ハ景時の像なりと云
とも是も又三河守の像なるゝし　證文一通　右大将頼朝卿建久七年此地よ放鷹あり時當寺
よ平林吉平家次等の太刀を賜ふもの　よ一夜あり其後恩賞とゝく寺僧よ鷹の羽あり
古文書なりとのゝとも真疑定ゆゑ

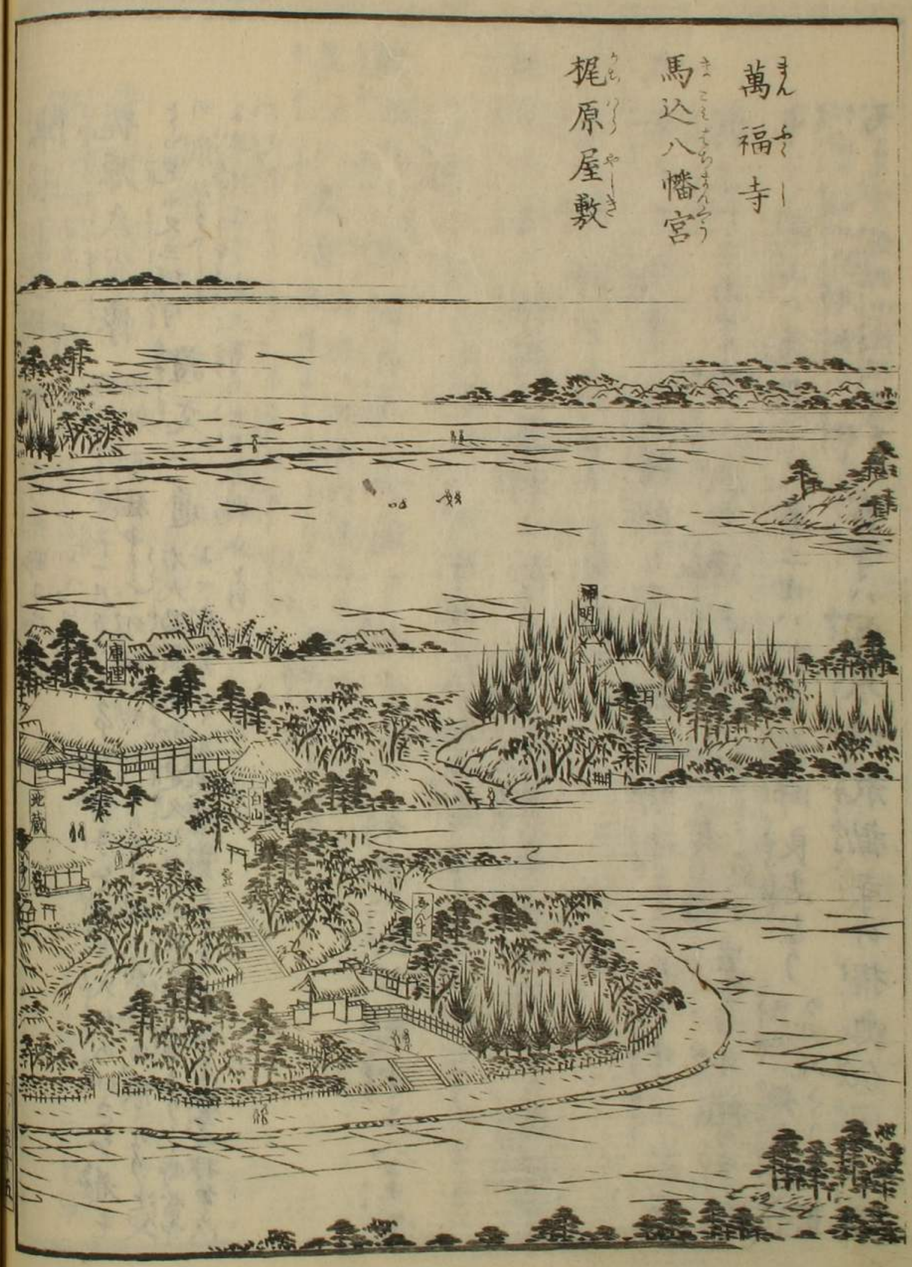
馬込八幡宮　同所より三丁ゆゑ坤の方池上道よあり
當社ハ梶原氏累代の鎮守なり

梶原氏宅地　同所通りを隔て向ゆあり今農民の園中よ入る土俗
景時の館とも是も三河守助五郎等の宅地なるゝし

鳳来寺峯の薬師　峯村よひゆゑ峯照山正善寺の持ゆく鳳来寺
峯の薬師をうつせりとゝふ

大金山光明寺　宝幢院と号也新田明神より五丁北北方
鵜木村よあり西山沢の浄刹なり　上古ハ真言宗寛喜年間の草創
わゝく開山ハ善慧上人弟二世ハ記主禪師良忠なり　良忠ハ鎌倉光時寺の開山なり延暦
仁治の間四箇年當寺よ住也　是より後鎮西の統相續せむ　當寺ハ開東浄教勧寺の權輿念佛弘通


長谷寺
萬福寺
本堂


萬福寺
馬込八幡宮
梶原屋敷

最初の道場

本堂本尊阿弥陀如来 立像三尺 山城國八幡村に住せる康尚と
いふ人の作なり 康尚ハ美濃守康信と云ひしが人の一子にして八幡大菩薩の示現あり
佛像を作る事を覚し故に此人の作なり佛像を八世に八幡の氏作と云伝ふ

額 大宝王 弘法大師 真跡なり

本尊縁起云開山上人五十三歳此年六月九日鎌倉鶴岡八幡宮へ
一七日の間参籠あり然に同十五日の夜社壇に僧形の弥陀如来出
現しまひ上人へ十念を相兼しまひぬ上人歓喜ありて翌朝下向の
時社外に至られしに異僧傍に行ありて上人に弥陀の像を附与
あり依て武州鵜木村へ迂しまつる 此時光明寺を故ちなん故に光明寺と号けまふと云

額 光明寶林 縁山大僧正満空筆

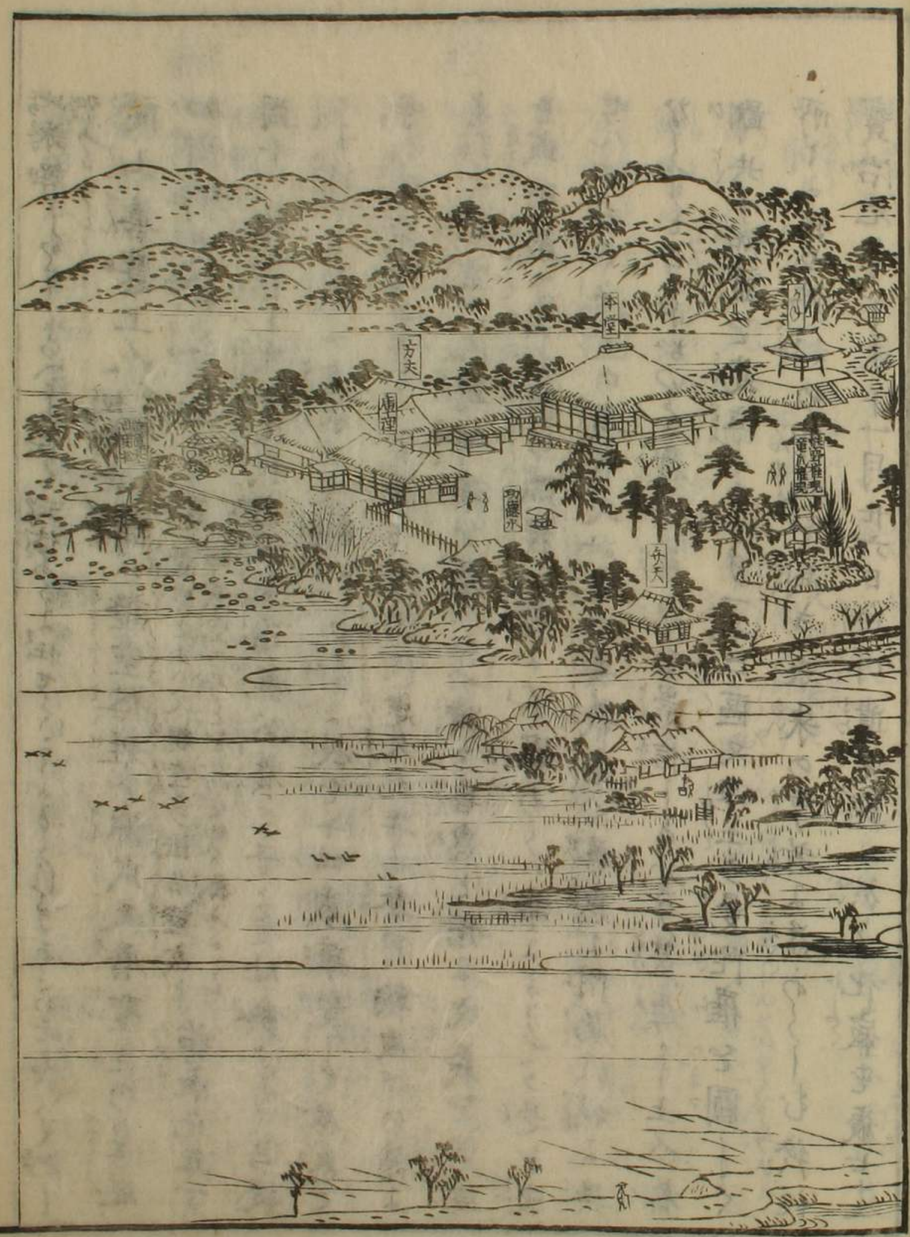
功徳水 同本堂の前左の方の井をいふ八幡鎮座の霊地に八幡宮なり開山上人鶴岡八幡宮へ詣ても功徳池弥陀の心水なり
も八幡宮の本地阿弥陀如来なり 当寺の鎮守
霊像を当寺の本尊と仰きまる然に此水を洗へハ一切の病苦諸難あるなしと云
故に此霊水を以て衆生の濁心を洗へハ本迹一致是を以て
荒塚 本堂の前左の方の相伝に遠江守雷火に撃れて死せしを塚に築きて
となり 新田明神の下に諸なり

観音堂 同境内堂の右にあり 縁起云善恵上人津國四天王寺の聖霊院に
不断念佛の浄業を創めし時此霊像を感得あり又霊示に任せ
善恵上人宇都宮實信坊に命して此本尊を当寺に安置せ北朝の延文四年新田左兵衛佐義興竹澤右京亮
堂を構営しこれに安置せ北朝の延文四年新田左兵衛佐義興竹澤右京亮
遠江守の謀計に陥入て矢口の渡の船中にして一族良等と共に水中に溺死せ
かくく義興怨て火雷神となり竹澤江戸一族を悉く撃殺せ殊に矢口の渡ハ奮怒
の跡なりとハ雷火墮るす屢ゆく寺院民屋も悉く焼亡せしハ浄心と
異を免れんを此本尊に祈念し雷火の難を遁るの奇特を蒙りしより其頃の像の
故に土俗雷留観音と称す 今に然り

當麻曼荼羅 本堂の後の壁上に糊を西山上人に数の曼荼羅を圖繪
寺に有を第二とせと西嶽上人曼荼羅釣に此曼荼羅の圖中中品下生の蓮華に青
蓮華となり三草計生ずるすあり人々奇異の思ひを一道を諸ひ来る是を拝せ
介に不浄の女人彼蓮華に手を歴れしまハ其華萎枯さうと今も残る中品下生の
蓮華の損るる形ありと記せり

善導大師影像 背善導大師自木像二軀を作て海に投して云く有縁の地に
置せ今猶存せり 至るとなり後全軀ハ筑紫に流れよりしまハ善導寺に安
漂流せしハ当寺に迂しまつると云 頸ハ此地に

扇一柄 善恵上人より宇都宮實信坊に伴ひて
三春三月都に出て東國に赴きたまふ其時宗内のこゝ實信坊を伴ひて
下るるに然に上人實信坊に告るをいはれて彼の扇しまひ光堂不
白川の関を過るに実信坊の扇に書付ひ実信坊まわくひしと
見の心を詠しまひ一首の和哥を持しまひ白川の関



光明寺

此詠解しがたしとへども古く云伝へるまゝ任せくうよりしるすあらはしく記し

開山善慧上人（初解脱と号く）諱ハ證空俗姓ハ源氏天暦聖主の皇胤

加州刺史親季の子なり（證空と云ハ父親季の法名證玄と師源空の号とをとりてかく称するとそ）治承元年丁

酉十一月九日に生る久我内大臣通親公養て子とも幼齢より菩提

心に住しける故に吉水上人（源空の事なり）の許に投を十四歳薙髪して善恵と

号す性俊逸ゆゑ一を聞く千悟に建久九年の春月輪殿下の請に

応ず源空上人選擇集を著しの時も善恵と偕に文義を考定

す或時殿下云く師の滅後此書に不審あらハ誰にかよりてか是を決

せん師云く浄土の奥旨又此書の要義悉く善恵に附属ス我に異

なるすとこゝろおもふく殿下善恵を崇信しのゆゑ甚厚し上人都

鄙共に伽藍を建立しのゆゑ一十二區又浄土の曼陀羅を圖しく

所々に収め佛經の印板を開き未来の学者に益あらしむ終に

寶治元年丁未十一月廿六日白川遺迦院に於て化寂す歳七十一

西山善峯寺に居しく盛に宗教を弘通あるし故に世に西山上人

と称しまゐらす（浄宗西山派の大祖と称す一世の行状は上人傳に詳なり）

当寺往古は大伽藍ゆゑ関東の高野山と称し衆人先亡兄に逆

修等の石塔婆を建参詣の人も多かりしゆゑ故ゆゑ今も古き

石碑石佛の類ひ此所彼所に存在せり（寺の大門より六七丁東の方に護摩堂屋敷と号く地あり

不浄なる時は祟りなしとて田畠耕作業とありてあり）

光明寺池　光明寺の南に添ふ往古の矢口は川敷なりしと云て今は

水流替りて南の方へ寄て流る池の長さ東西貳百余間幅は南北へ

五十間ばかりもありとなり（此池の里老傳云記主禪師当寺に住職しの時元の如く故ちなみ其餘まゐりく今は佛會執行の時は彼魚あまくく水上に浮出るとなり）

新田大明神社　光明寺より五丁南の方矢口邑にあり別當は古義の

真言宗ゆゑ真福寺と号す高畑宝幢院に属す祭る所の神は

新田左兵衛佐義興朝臣の霊なり十日を縁日とす拝殿の修営を

新田明神社
真福寺

本社の地ハ古廟なり則其間に瑞籬を造る説く中ハ一堆の塚
ゆゑに蒼樹繁茂せ（此地ハ昔の奥州海道ゆく往古ハ廟後の耕田の地こなく
沼と称せ長凡三百間半横四十間或ハ三十間程あり玉川の流も此地より傍く流れしとあり題を矢口社
なりしと云り今ハ水流付おとり土俗のつく是も昔の川敷
鞍掛榎（社前まあり至ての老樹なり）
古廟碑（社前左の方ハ建とり碑ハ服元喬書ハ鴉石葛辰なり古ハ後の方へ向ふと云今ハ社の方へ向ふ）

矢口新田神君廟碑

昔元弘帝出居南山足利氏立光明帝于京於是南北分朝諸國各擾其黨戰爭數年而新田氏擧族勤王南朝宗人左中將源公義貞卒其族衰神君者中將公廣子名義興勇氣掩世延文中以兵衛助爲南帝密徇東國勢將復張先是足利氏使其子基氏居畠山鑑倉令開東畠山國清爲副時共出次武州患之乃陰共謀佯以幕中士竹澤嘗事神君因使圖之竹澤使謂神君曰臣無罪見疑於與竹澤有隙逐之竹澤曰願有所效神君納焉乃節美女進國清若得再事舊君有所因圖害之美人有夢惡懼止神君不出竹澤不克果而神君亦不猜近之乃又請畠山使江戸氏二人助焉亦佯逐之二人因竹澤來神君納焉於是三人比事焉勸襲鎌倉且曰有衆難襲使分士卒先神君至矢口津從者十三人月竹澤預與舟人謀竄舟而塞之使待于岸既而神君

與其人衆焉中流舟人佯失墜船具於水沒而求之陰去其塞泳而逃水入舟將沈竹澤江戸夾岸伏甲噪而出神君悟既不可爲乃怒呼曰吾爲厲報女自屠其脇腋而沒十三人從死焉後害者至津雷電晦冥神君介而見皆死厲見不已津民懼乃爲立廟追祀其神至今四百餘年人猶懼威靈不敢褻慢云今矢源頼寛遣使立碑自書篆額乃又使元喬撰舊史叙其略勒石係以迎送辭其辭曰

霹靂激兮電揚光龍車鸞兮玄雲翔神之至兮欻亡常儼如在兮水中央被犀甲兮張彫弓既一怒兮奮鬼雄仇且殪兮懟未窮將以憺兮茲壽宮蒸肴醴兮氷蘭蕙潔余祀兮神無憐固既毅兮勇以厲掃妖氣兮永不替水澹々兮清以洌往又來兮羌可濟良辰和兮天門霽顧余降兮雲之際

延享三年春三月守山源頼寛篆平安服元喬撰

烏石葛辰書

新田左兵衛佐義興書簡一通（當社ハ收む）

先度汉西内書状仰出ゆ丁寧申通所意色異于他ゆ之儀ゆ仍為内感ゆ使一条治ア門補ア下ア知ゆ西国ゆ九州ゆ儀弥ゆ抽ゆ忠義

作法お伝うる形要は特秘密細き者ニ意寺本
賞可令伝達ぶ〻〻〻〻〻

十月十一日

波多犯若〻〻

義興判

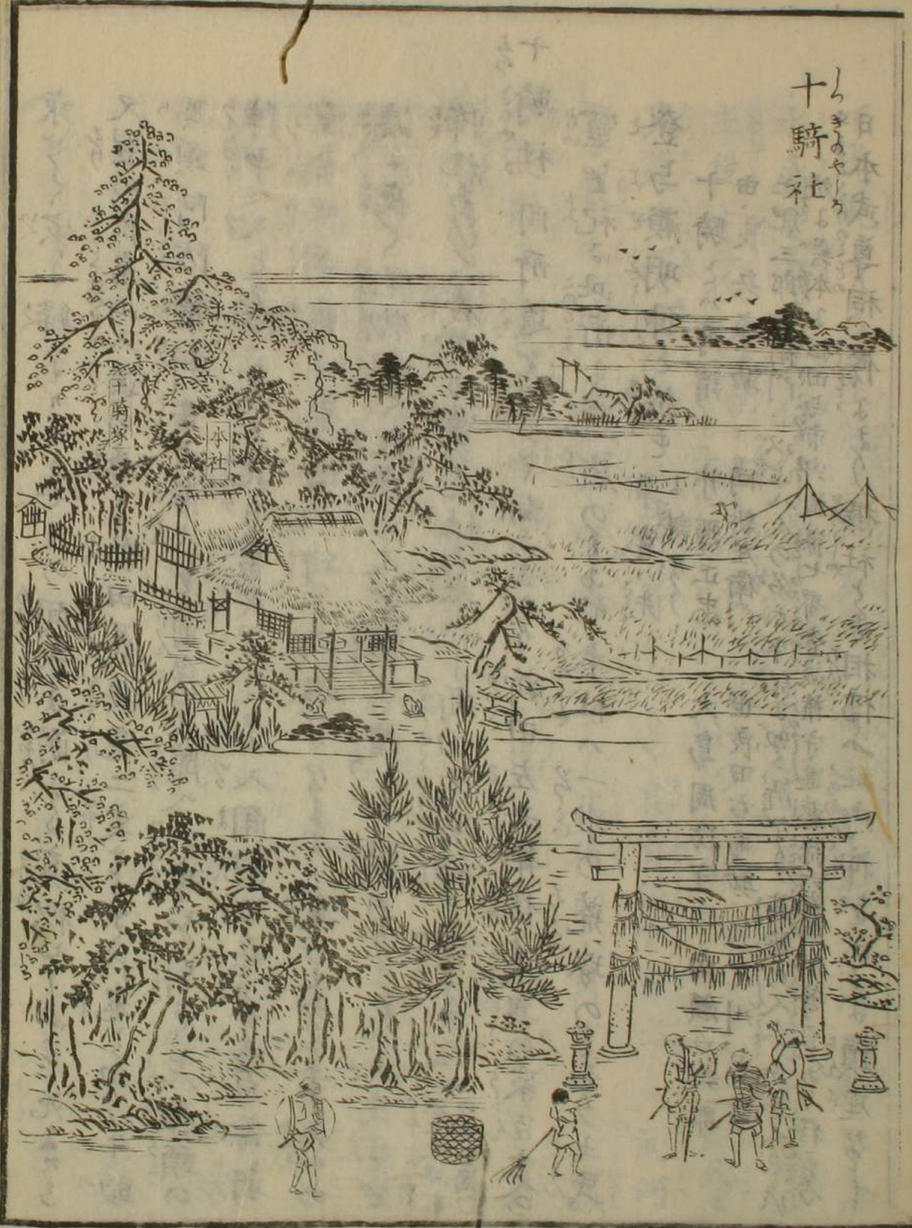
其余兵器古陶器の類ひ寺宝ハ〻〻〻〻是を略す
太平記云 新田左兵衛佐義興ハ 義貞の妾腹の子なり上野國ニ居
家ニ志あるむさし上野の兵ども此義興を大将ニ取立三万余騎ニ共ニ鎌倉ニ責落し
吉野へ〻〻〻〻〻〻〻〻義貞の家を興さんき器なりとて頃童
名を徳寿丸と申せしを元服せさせ新田左兵衛佐義興と召れ〻〻器量人ニ勝れ
智謀衆ニ秀〻れハ正平七年むさし野合戦あるひ鎌倉の軍ニも大敵を破り方々辛ふ
獨歩なり 当る古今 父左中将戦死の後ハ越後國ニあり〻〻武蔵下野の國
中わく新田家ニ志を寄る輩竊ニ音信を通し〻れハ両國の間ニ
其勢漸く萌せり然ニ此ニ鎌倉へ聞えれハ管領足利左馬頭基氏
畠山太夫入道道誓大ニ驚き義興ニ所在を尋く度〻男を向ると
ひとも義興事ともせすして打破る千変万化ま〻〻人の態ふわ〻ひ

故ニ是をそ〻〻あ思し道誓潛ニ竹澤右京亮と謀る竹澤を義興
ふ下らしめ夫より後種〻の毒計を用ひ義興を討んとまれとも未時
至らす 竹澤右京亮ハ旧義興むさし野合戦の項其ニ属しく忠ありれとも
後鎌倉方とあり〻〻より旧好を忘れかゝる無道の翔をハかせ〻〻り
竟ニ美女をそ〻〻く心をそ〻〻し無二の味方と思ハる迫ふあり〻〻ハ
竹澤偽て鎌倉を亡さん謀を運ら〻大ニ義興をそ〻〻ハ義興
其意ニ隨ひ延文三年十月十日の暁主従僅ニ十三人忍んてこ〻ろ
發向せ既ニ矢口の渡ニふ至る舟ニ乗せ竹澤先ふ謀をまうく故ニ
渡守謬て櫓楫を取落し是を採んとのひ偽く水中ふ入兼く鑿
置〻〻り舟底なる二川の穴を塞し木を拔れハ河水注き入く其
舟沈むとする時向の岸なる江戸遠江守ハ伏兵河辺ニ起る興をひく
〻ふ於く義興初其謀を察し大ニ忿て自ら腹掻切てそ失ふ井
彈正も續ひく自殺し其余世良田右馬助大島周防守あうひ田良
兵庫助同新左衛門尉等ハ引組て差違ひ又ハ互ニ首を掻落し

やくちのこと
矢口古事

て死しける土肥三郎左衛門南瀬口六郎市河五郎三人ハ
水底を潜まくく向ふの岸よ欠上る敵三百騎よりあひ終よ
主従十三人（太平記の書よ討死の人主従十三人とあれと義興を始として九人の名を注せり其余四人の名あらへし）共よ討死せ
其後竹澤及ひ江戸の両士等ことくく其首級を奪出し入間河
なる基氏の陣へ馳参し實験よ入らるる其後同十月廿三日遠江守ハ
今度賜もし恩賞の地へ下らむとし日暮よ及ひ矢口の渡よかゝる頃
雷頻よ鳴震きられハ懼もく馬を走せしある辻堂よ入らんとす
（此辻堂と云ハ鵜木光明寺観音堂のうちなりとも）折くく黒雲一むら江戸ろ頭の上よ落下りて雷
電月の邊よ鳴閃めきられハ餘るよ怖しく後を吃と顧るふ義興
火縅の鎧よ龍頭の五枚甲の緒を縮く白栗毛なる馬の額よ角れ
生たるか如く鞭を打く遠江守を弓手の物よ射ん鐙の鼻か落
下るくるるる七寸計なる鳥俣をかしらの乳の下へかけぬつ
と射通さるると思ひく馬より倒よ落て悶絶しるを從者共輿よ

乗せく家よ帰るるる七日の間水よ溺るる真似をしてを死よるる
又翌の夜畠山入道の夢よ新田義興長二丈ばかりの鬼とあり牛頭
馬頭阿防羅刹共十餘人を前後よ隨へ火車を引く左馬頭の
陣中へ入とんとるるる其日雷火よかるる入間河の在家三百餘軒
堂舎佛閣數十箇所一時よ灰燼となりとり是のみならず矢口の
渡よ夜く光物出く往来の人を悩し種々の祟ありられハ土民是を
怖れあひて義興の霊を一社小奉祀し新田大明神と崇るると云云（太平記の要を摘む）
十騎社　同所道を隔てく向ふよあり新田左兵衛佐義興の家臣十人の
霊を祀る此所も拜殿のみあて本社ハ一堆の荒塚のみあり土民
登与瀬明神と称せる事實ハ先
十騎とハ所謂　大島周防守　南瀬口六郎
由良兵庫助　井弾正忠　世良田右馬助　市川五郎
土肥三郎左衛門　同新左衛門　（上ハ八人の名ハ平記よ作なり其餘の人名今考へ難し）
然る異本よ松田与市宍道孫七堺壹岐権守進藤孫六左衛門等の名あり猶の考
日本武尊祠　傍よあり摂社とも相傳ふ此御神をまくよ鎮座なし



奉るゝハ尤久しと雖 此地上古ハ奥州への街道やゝく日本武尊東夷征伐の時爰ゆく矢合せしゆゑ旧跡なりとゝふ 矢口の地名も此事によりゝく發るとゝふ

六郷の川を隔て稲毛の地より矢向と云邑名あり 題も其時の矢の向ひゝゝる地故よりとなり

古川薬師如来堂 古川村より新田明神より東南の方二十丁ばかりを隔つ醫王山世尊院 域作東光院 安養寺と号し新義の真言宗やゝく高畑村の宝幢院より属を上古ハ東光坊と号せしとなり本堂の額醫王山の三大字ハ黄檗高泉の筆なり

本堂 本尊薬師如来 五尺五寸 左右弥陀釋迦二尊ハ各五尺三寸 脇檀十二神将及ひ四天王の像も共より行基菩薩の作なり 往古當寺より存する所の銀杏樹より瑞光を現を依く彼木を以く像材とせしと

銀杏樹 本堂の前左右より二樹並ひ立て諸人乳のあきらの祈るよ驗ありとそ此霊樹の下より求め祈願を奉れ四五尺又ハ三尺よあるもの眼疾を患ふる者此霊水を以く洗ふ其驗あり

杉本霊泉 本堂の前右の方の杉の下よあり

五智堂 十王愛染の像もあり本堂の右より並ふ

本堂

古川藥師
庫裡

寺記云行基菩薩関東遊化の頃和銅三年庚戌此地ニ至るゆひ
今安置しまる処の本尊薬師佛并脇士弥陀釋迦の両如来及ひ十
二神将四天王二王の像共ニ自造立せられてハ安置ありしハ遥の後
天平五年癸酉春三月　聖武帝の后王子沙縦生の頃乳味盡させ
ゆゑ故ニ行基菩薩の奏ニよりて当寺の薬師佛ニ祈誓まゐらせ
其験を得ゆひ頃銀杏樹二株を奉納なしまゐらせ又同年の
秋御堂造立なしまゐらせ七堂伽藍の霊地となれりとぞ　如来の霊應著しく今も
婦人乳の少きもの至心ニ祈請ス然ニ遥の後此地の領主某諸宗責伏の宗
風おこりて当寺の繁栄を深く妬み堂塔破却しまゐらせハ銀杏樹の根
下ニ捨て風雨ニ浸さしむ　其子孫断絶せ　其後永禄の頃住持栄傳十
方ニ勧進して一宇を営み本尊を移しまゐらせ

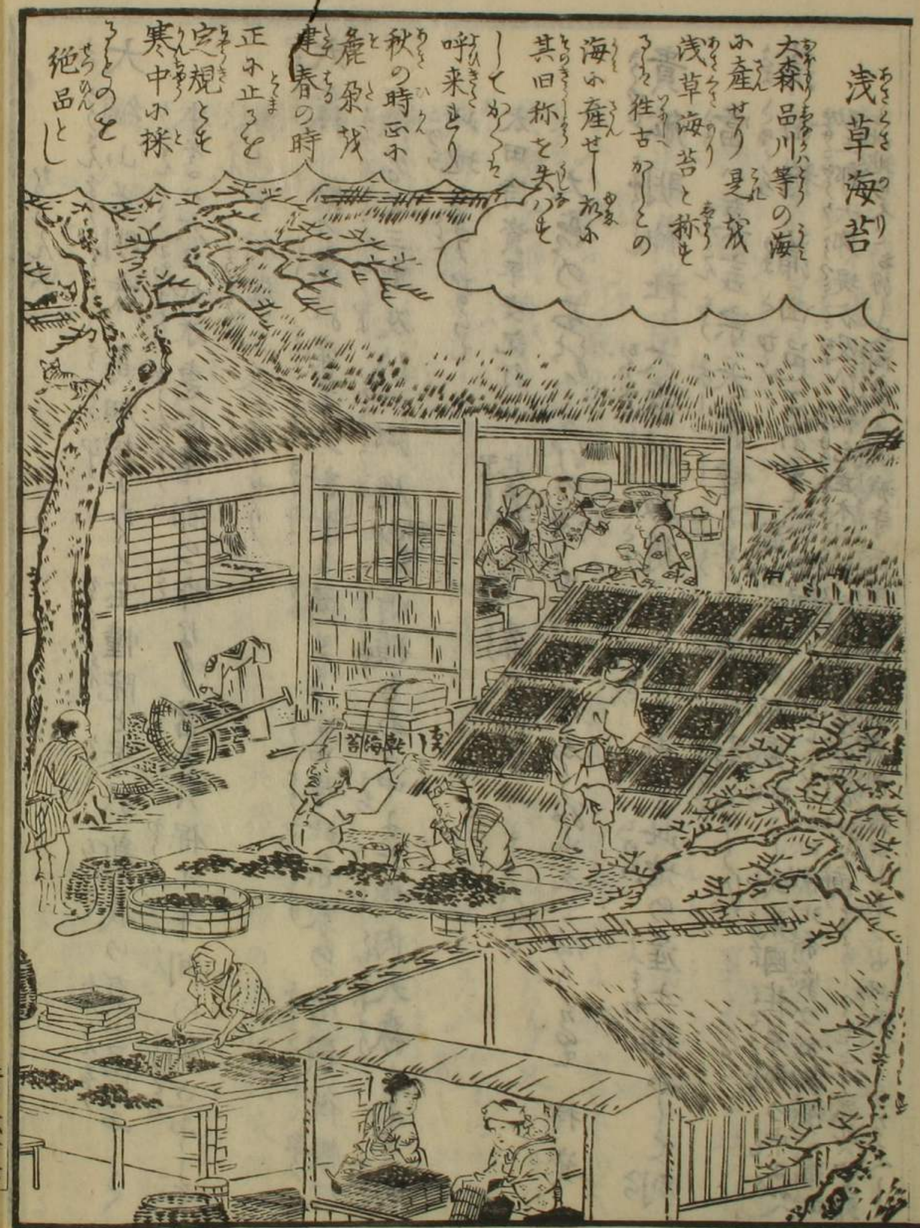
按ニ武蔵國風土記残篇ニ荏原郡満田郷満田寺ニ清宗法師薬師佛ニ安置
せりとあり又同書ニ満田郷より梅を貢とせしゆへ
記してあり古川村大森蒲田等の辺其地ハ相應せしゆ梅樹其実を採て都下ニ
繁くうる元多しこれ是とあるべき考ふれハ上世の満田ゆゑ梅の来ること加ふ又和中散もある

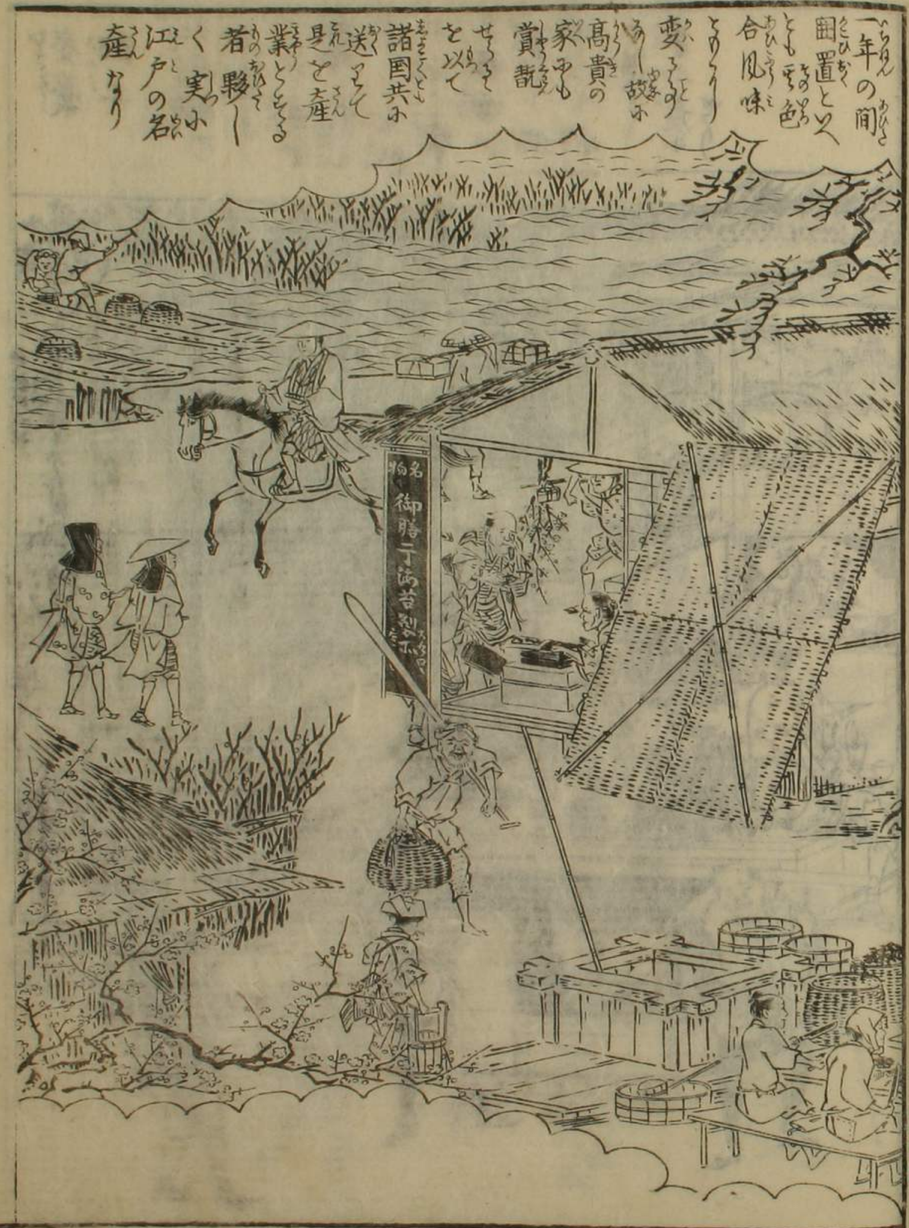
大綱山光明寺　高畑村ニあり宝幢院と号ス　新義の真言宗ゆゑ
本尊ハ大日如来恵心僧都の作なり当寺ハ保元年間の創立ゆゑて
開山を行観上人と号せり

大森　鈴の森ヶ南不入計村ニ隣ル　小田原北条家の所領役帳に
渋谷又三郎及ひ六郷殿此人球磨所領とある中ニ六郷内大森とあるハ則
此地のことなるべし
太田持資平安記行　大森といふ森のうけおやをそ
大森の西ちかくの海ちかくなるも考へぬ立とあり　持資

貴船明神社　大森村海道より右ニあり　此地の産土神ゆゑて別
当ハ真言宗大森寺と号ス　来由詳なしス

蒲田梅　蒲田邑ニあり　蒲田ハ和名類聚抄ニも武蔵國荏原郡の中ニ如へ
萬太と訓とあり小田原北条家の分限帳ニ蒲田
助五郎六郷堤方及ひ稲毛庄木月郷今井の内の地と領まるの中ニ然れハ聖五郎
も此地の人とあり又同書ニ圓城寺所領の中ニ六郷内鑓田とあるも此所のうちなるへし


浅草海苔
大森品川等の海ハ産せり是成
浅草海苔と称と
往古かゝとの
海ハ産せ
其旧称を失ハ
呼来り
秋の時ハ
春の時
正ハ止
寒中ハ採
絶品とし

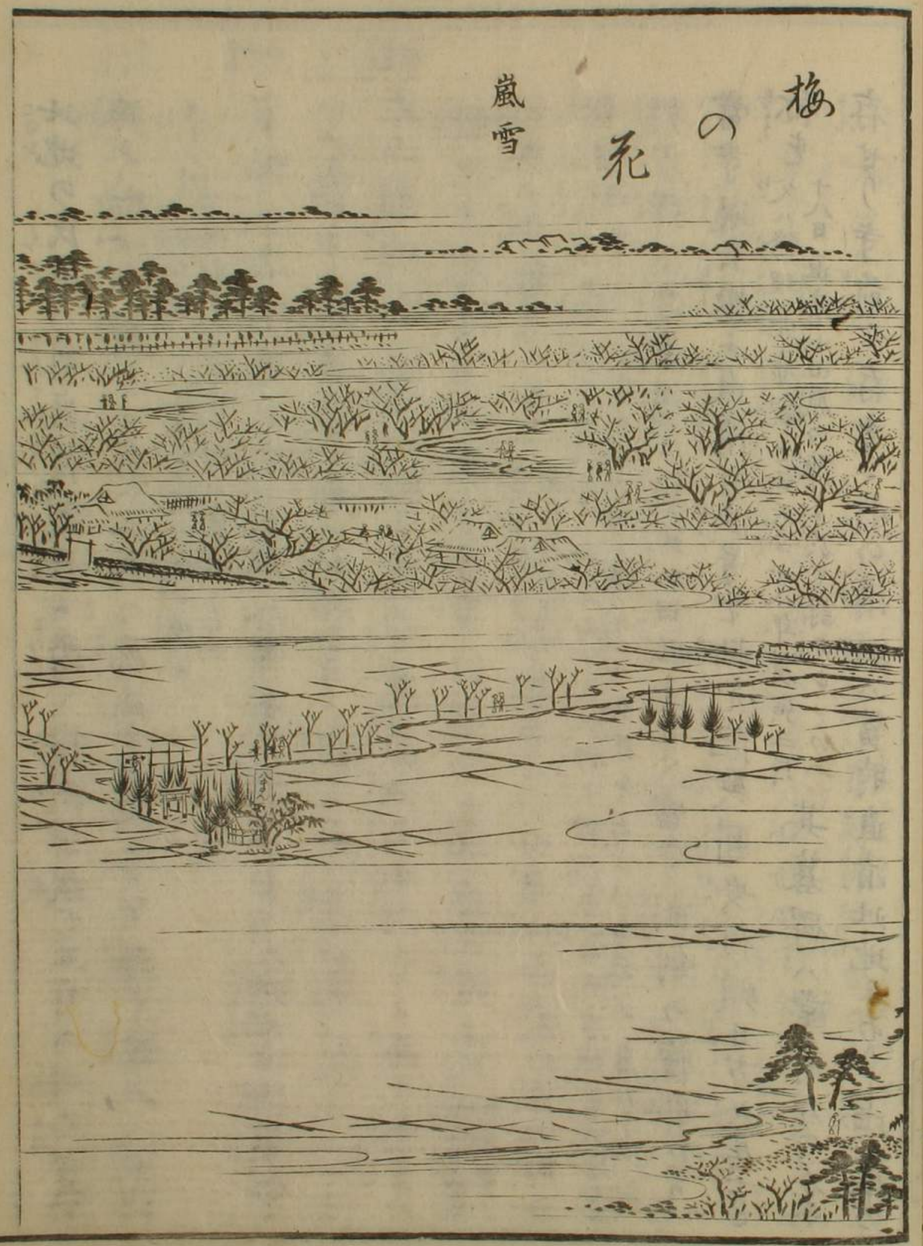

一年の間
囲置とも
色
合風味
変
高貴の
家
賞翫
を以て
諸国共ハ
送
是を産
業
者駿
く実ハ
江戸の名
産
名物
御膳海苔

麥藁細工

大森村の名産りして是を鬻く家元多し五彩に染て種々の器物を製す他邦の人求め得ること家土産なり

大森和中散
大森本家
和中散
和中散
和中散

梅干
張
見知
て
居る
蒲田里梅園
行方運正宅跡


梅の花
嵐雪

此地の民家ハ前庭後園共ニ悉く梅樹を栽て五月の頃其實を採く都下ニ鬻くされハ二月の花盛ゆゑ幽香を探ル遊ぶ人火れ

三右衛門と云る農民の園中殊ニ老樹すくく花香尤勝れり

行方彈正忠明連宅地　六郷八幡塚の辺を云なり此地ハ御園村と云る所あるも明連ゝ花園の旧地なりし故ニ名ゝるとかり

性光山圓頓寺　蒲田村にあり日蓮宗池上本門寺ニ属ス本尊ハ釋迦多寶等の木像を安置ス開山ハ九老僧日證上人池上大坊の開基なり

中興ハ日藝上人なり　寛永二十年癸未二月朔日寂

領主　小田原北条家の分限帳ニ行方与次郎六郷大師河原菖西寺嶋等の地を領ス与次郎ハ彈正忠の氏族名あるひゝ始の名なるべし

行方彈正忠直清ゝ宅地の旧跡ハ今ハ當寺開創の檀那なり

當寺過去帳ニ直清の法号を性光院殿圓安行頓日方大居士と称ス　父ハ修理亮康親と云天正十八年庚寅三月十八日直清小田原の陣ニ於て討死をとかり

其墓碑ハ堂前左の方ニ存せり寺前ニ存する所の溝堀ハ當時直清此地ニありし頃の構の外堀を其儘ニ用ゆると云小田原記ニ永禄九年武田信玄小田原小人數少き隙を窺ひ思ひよるる方より小田原へ押寄るとある条下ニ六郷ニ行方彈正居ゝし間己ゝきの近所なる八幡を要害ニ構へ稲毛の田島　田島兵部丸と云　横田　按ニ横山式部成綱　駒林　駒林圖書定朝をかり等を引卒し櫓を焼落しく甲州勢を通さも信玄ハ品川の宇多河石見守鈴木等を追散して六郷の櫓落れハ池上へかゝる池上寺を追捕し池上寺ハ本門寺をかり　此寺の僧を案内者として矢口の渡を舟ゆく渡る稲毛の平間とかり所へ渡る稲毛の十六郷を追捕もとかり

蒲田八幡宮　同所道の傍ニあり前ニ記せし小田原記の文に行方彈正其宅の辺なる八幡を要害ニ構ふとあるハ當社のすなるべし

按ニ三代實録ニ貞觀六年八月十四日戊辰詔して武蔵國後五位下蒲田神を以て官社ニ列せとあるも當社のすなるべし

行方山妙安寺　海道の内新宿にあり日蓮宗ゆゑく本門寺ニ属ス

本尊ハ三寶ニして開山ハ日現聖人なり行方氏室圓光院妙安日行

八幡塚
八幡宮

八幡塚
八幡宮

大坊の菩提所と云 天正十七年丑十月晦日とあり

朗羽山長照寺 獵師町よりあり日蓮宗なり 當寺ハ豊太閤秀吉公北守佛なりと称しく北辰妙見大菩薩を安也

六郷八幡宮 六郷の惣鎮守ゆゑ八幡塚村よりあり 別當ハ真言宗ホしく浄幡山宝珠院建長寺と号ス 相傳ハ鎌倉右府将軍頼朝卿安房國より大軍を率し鎌倉へ入る頃此所ゆゑ旗を建軍勢の著到を記しゆゑ旧跡ありとゝ 勝利の後鎌倉鶴岡八幡宮を勧請しゆゑとゝ 祭禮八六月十五日ゆゑ神輿羽田より大師河原へ移るゆゑ 當社ハ頼朝卿建立の時梶原奉行せしゆゑ記せし梁牌ありとゝ

八幡塚 本社より右の方の蒼林の中よりあり 按ハ梶原ハ景時なり 馬込村万福寺の条下ハ幸ハ所の小田原北条家の幕下梶原三河守或ハ梶原助五郎等の内なる歟 堤の塚ゆゑ樹木繁茂せり

旗立杉 社地ハ

古家敷 大げのかゝへの畑を云 按ハ行方彈正明連ゝ家の跡なり 当社大げ石橋の通を古の海道と称せり 又竹林あり 昔頼朝卿旗竹ハ用ひられしゆゑ或ハ又輿を地ハ繁茂せしゆゑとも

六郷渡 八幡塚の南よりあり 此川ハ多摩川の下流ゆゑ八幡塚より河崎の驛への渡しなり 昔ハ橋を架せしゆゑ享保年間田中丘隅と

いへる人の工夫ゆゑ洪水の災を除んゆゑ橋を止めて船渡ハせしとあり

田中丘隅ハ俗称休愚 右衛門 嘉古と称す 冠帯老人と号ス 水を治めしゆゑ此人の工夫ゆゑ今ハ其河原ハ其事を記せし碑あり 又民間省要といへる書を著す 今上平間村の田中山妙光寺と いへる日蓮宗の寺境ハその墳墓あり

東海道名所記ハ此橋の長さ百二十間とあり

癸未記行 六郷橋吟

注云 俗説畠山重忠云 江州瀬田 参州矢矧 同吉田及ひ此六郷の橋ハ由 東路の四大橋といへり 又江戸の三大橋とハ両國橋 千住大橋 六郷橋ハ

忠者武州甲斐而屢往来鎌倉則不可無其理故首 鷲峯先生

句及此云云 河崎東畔六郷里俗称重忠居此村重忠武州七黨

長攻城野戰報君恩攀龍附鳳勇功士往事悠々遺

蹤蛇橋去江城五里許出者入者頻繁闘國列侯

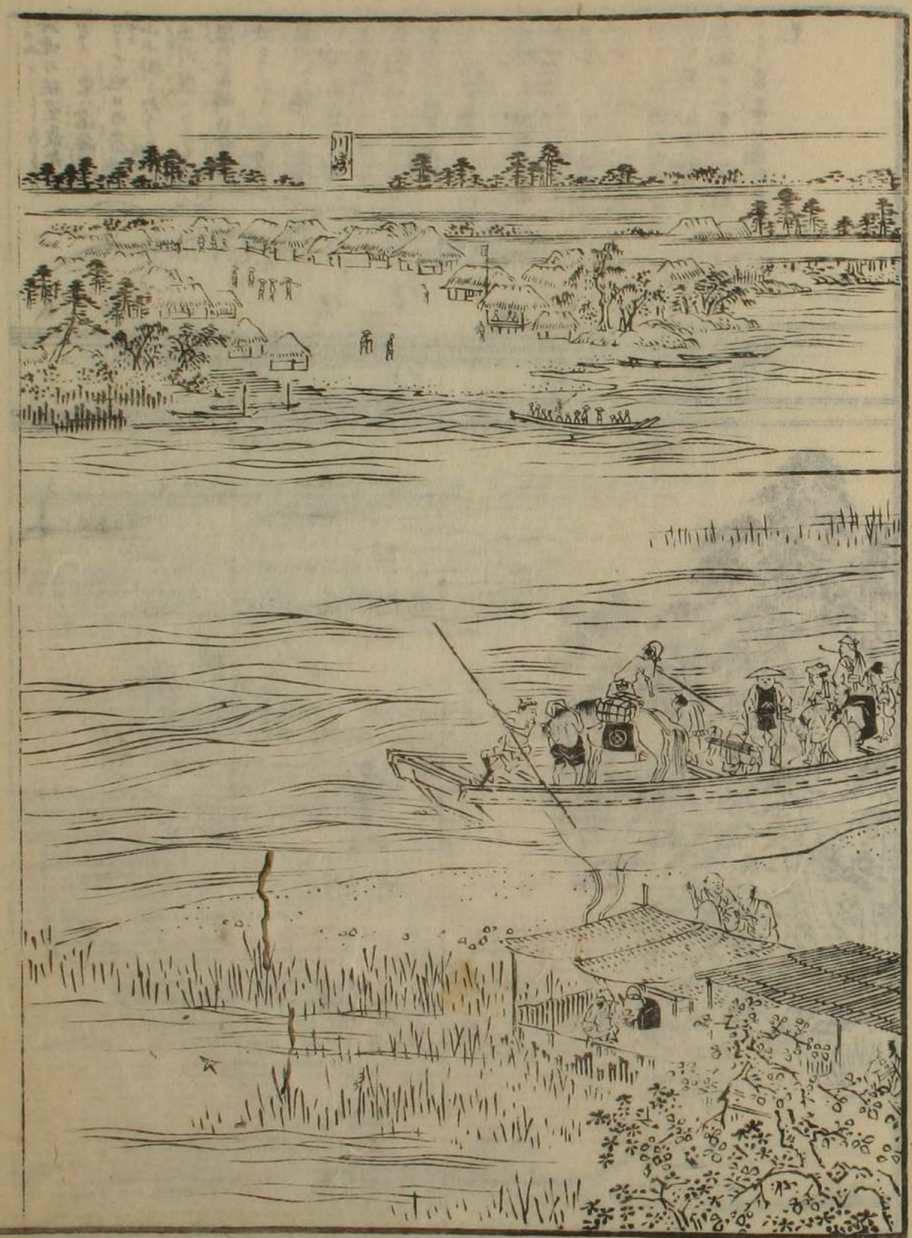
呼可汗尊士農工商幾經過皆是名走與利奔可笑

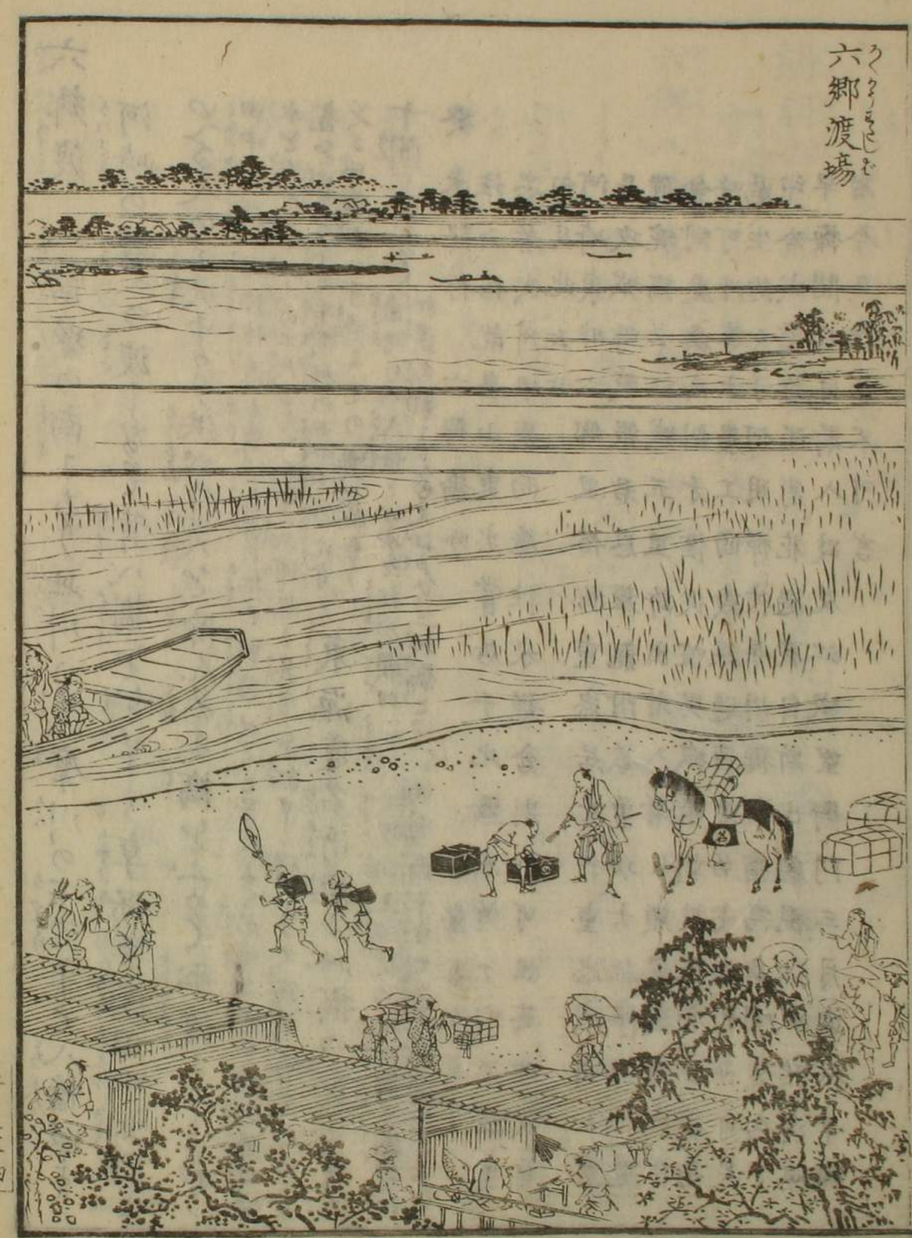
尾生約女子何用禪徒弄胡猻玄霜搗盡朝裝氏丁

印吟憶許渾菊花過後自斯出顧視江城殆消魂

梅成花開時自斯入跂及江城望衡門三月遠征幸歸

府今日歡不可言




六郷渡場

此地の眺望最秀美なり東滄海漫々として旭日の房総の山ゝ掛るあり南ゝ玉川混々として清流の富峰の雪ゝ映ぜるあり西海老取川を隔て東海の驛路あり北ゝ米俗澤うり北ゝ筑波山峨々たる飛雨行雲の氣象万千なり

此嶋より相州三浦浦賀へハ千ゝ當りて海路九八九里南総木更津の麥へハ巳ゝ當るゝ海路八九里南北総の界ハ卯ゝ當りて海路十三里斗を隔てゝ富峯ハ酉の方ゝ見

羽田
弁財天社

按ニ北条家の所領役帳ニ六郷殿六郷大森分同小花和の地を領し六郷の内大森を谷又三郎領と又六郷内鎌田を圓城寺同是方ハ蒲田勘五郎六郷原分ハ嶋津弥七郎六郷雪ヶ谷同入不計花井分共ニ大田新六郎六郷宿ハ麓原日向守同入不計藤何某同牛久新次郎同一ノ倉蒲田分同戸越ハ梶原分も太田新六郎所領なり然ニ六郷内根岸梶原分六郷内極楽寺分六郷大師河原行方与次郎所領同川崎内万透院分六郷内運田畑新三郎領せり かくの如く昔ハ郷と称せし地の廣ク遠く林春斎先生寛永二十年癸未記行ニ畠山重忠嘗て居住ましましと考へ然ニ重忠ハ武州甲族なりしかとも鎌倉へ往来を其理なきふあるへからず故ニ世人ハ此所を江戸名勝志ニ渋谷金王丸の一族ニ渋谷庄司次郎重國といふ者あり違論のあるを以て一家を立て川崎の六郷へ引退き渋谷氏を改て川崎と名乗り云々依考るに重忠も畠山庄司次郎とのみしるしハ茂人川崎庄司次郎と混して重忠と名乗りしハ府あゝ重忠ハ男衾郡畠山ニ居住せしかとも鎌倉への往来ハ此所を通るへからず鎌倉へハ甚しき廻り道なり中ヨリ関戸へかゝりて此地へかゝりて鎌倉へ往ハ甚しき廻り道なり

要嶋辨財天社 羽田村の南の洲崎ニあり故ニ羽田辨財天とも称せり

此羽田の浦ハ扇の凙と号し故ニ此地を要島と号し 別當ハ真言宗ニして金生山龍王蜜院と号し本尊辨財天女の像ハ相州江島本宮巖窟辨財天と同躰ニして弘法大師の作なりとの説ハ此霊像背江戸有馬侯藤原純政の家ニ傳へて尊信あるしふ當社海誉法印の時霊夢ニ感する所あるを以て宝永八年辛卯四月此本尊を此地ニ迁しまるとなり品川大竜寺開山香國禪師正徳三年ニ誌せる所の社記と有馬家の

縁起異同少し 又當社ニ如意寶珠一顆を安置せり天然の物にして其質金銀銅鉄の類にあらず といへり相伝ふ武州日原山ハ弘法大師開創の地なり山中ニ大日孔雀水と称するあり水中一顆の宝珠を存せ然ニ往古此宝珠玉川の流ニ落ちひ羽田の辺ニ止る水中昼夜霊光を現し依土人ひそんして徊を下し是を得る後社を建て崇敬を當社是なりと云云 異縁起ハ東治二年の春當社の南の大河ニ徊引して一顆の宝珠を拾ひ故ニ玉川と名つけ玉川作才天女と称し又此地往古より社殿を経営するとのへども屢風波の災ニ かゝりて永く保るあたハさるしるし 別當海誉阿闍梨法華経全部の文字を一字一石ニ書寫し此海底ニ沈めて島を築き宝殿を建立せその感應ハあらたなる夫より已降青松鬱蒼として繁茂し庭上苔むし竟ニ風波の難を免るを得るとかや